青鞜

第十二月號

大正四年十二月一日發行（毎月一回一日發行）　第十一號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第五卷

第十一號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十二月號目次

傲慢狹量にして不徹底なる日本婦人の公共事業に就いて（論文）……一　伊藤野枝
兒童の世紀（飜譯）……一九　山田わか
短歌十首（短歌）……三〇　與謝野晶子
初戀のなりゆき（小說）……三二　岡田八千代
薄ずみいろ（小說）……三八　長谷川時雨
たゞ一人（小說）……四八　加藤みどり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最初の家（小說）……五四　五明倭文子
戀の誇り（短歌）……六九　原阿佐緒
私の生活（感想）……七三　三ヶ島葭
未成品二章（小品）……八四　生田花世
二つの心（對話）……八九　岡田ゆき
青鞜詠草（短歌）……九二　諸氏
祝歌　畔蒜こさ子　月光　望月れい子
燒跡　山の井峰子　長詩　無門照子
別れた友へ（手紙）……一〇一　山の井峰子
らいてう氏に（手紙）……一〇五　伊藤野枝

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四版

窪田空穂著

萬葉集選

中村不折装

菊半截約三百頁　四十五錢　税四錢

絹表紙木版彩色　頗美本携帶至便

▲愈々日本民族代表的歌集の新選註完成したり▼

新版

窪田空穂著

續萬葉集選

中村不折装

菊半截三百餘頁　五十五錢　税六錢

絹表紙木版彩色　頗美本携帶至便

▲氏は清澹なる本集中より殊に自己に興味あり集中の心核と思はるゝもの三百餘首を選みて簡單なる評釋を施し感想を附す。絹表紙菊半截の瀟洒なる装幀。從來讀み方穿鑿の難解なりし爲に惟り專門家の玩賞に止まり、偶解釋あるも精細に過ぎ乾枯に流れ頗る常人に遠き憾みありし本集は此書に依つて始めて一般人に愛誦さるゝを得べし。蓋し萬葉集の如き最も平民的色調に富める歌集は決して少數の學者歌人の所有にあらずしてまさに國民全體の所有と謂ふべき也(信濃毎日)

▲歌に昵む人々にとつては萬葉集の歌の眞情を流露した醇朴さと近代の詩にも減らぬその人間味とは力强い誘惑力を持つてはゐるがさて二十卷四千の歌數とやゝ難解な煩はしさは一寸近く事を許されない斯らいふ不滿を持つてゐる人は本書について其の心核に觸るがいゝ(大阪毎日)

▲著者は古典の新鑑賞者として當代に類なしその標準の極めて妥當にして藝術上の權威あることとこの小册をして千金の重みあらしむ(讀賣)

▲萬葉集の佳篇を拔き之を假名交りにわかり易く書下し著者の周密なる註解を附したもので萬葉集の一斑を覗はんとする者に好適な書である、空穗氏の批評は光つてゐるしかも一方に學究的な忠實さを失はぬ所最もよし(新潮)

▲短歌長歌に對して詳細な註を施したもので萬葉集研究者に取りては缺くべからざる良書である(早稻田文學)

▲今前者の缺を補ふて此續編を成す、集中傑出せる作歌を拔き難解の句には一々解釋も加へまた歌全體の批評を附したれば初學者にもこよなき手引とならう。從來「萬葉集の中心思想」てふ論文亦有益の文字(秀才文壇)

▲前者「萬葉集選」の便益と眞相とは、既に一部の認めたるところ、此新著亦著者の新しき評釋者としての天才を遺憾なく發揮したり、是には長歌をも摘錄せり、附錄「萬葉集の中心思想」はよく情理を盡したり(讀賣)

東京市本郷元町・日　月　社・振替東京二八一九一四番

傲慢狹量にして不徹底なる日本婦人の公共事業に就て

伊藤野枝

現在の日本に於いて上中流階級に屬する教養ある多數の婦人連に依つて組織される團體が可なりある。その何れも權力ある後援者並びに多數の會員と相當の財源をもち等しく公共事業の爲めに働くことを目的としてゐる。而してそれ等の各團體の存在は鮮かに各人に認められてゐる。併しその目的とする事業は？

甚だ鮮明に事業に向つて注がるべき力の團結は認められながらその事業はすべて誠に微々たるものである。憐れむべき不完全なる狀態に在る。これは何と云ふ不合理な事であらう。私は今の處それ等の諸團體は事業など云ふことは唯だ單に社會的な信用を得る口實の一つであつて何れも婦人連の虛榮心――言葉をかへて云へば、彼女等が相當の婦人としての價値を贖ふ爲めの一交際機關としてより他に存在の理由を認め得ない。世の多くの人もまたこの理由を無意識の間に認めてゐるのである。何故ならそれ等の婦人の團體の會合について、その華やかさを、または名譽ある貴婦人連の列席を諸新聞、諸雜誌は筆を揃へて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

報導する。併し私は、その會合が如何なる趣旨によつてなされたか、或は如何なる用法がなされたかについて且つて內容ある報導に接したことはまあないと云つてもいゝ位である。會合に於ける餘興についての委しい報導はあるが會の事業とか或はその事務の內容について洩されたことはない。會長、幹事、或はその他の職員の改選とか或は會計の報告がそれ等の會合の唯一の事務報告である。それ以上のことについては何事も洩されたためしはないやうである。

偶々、何かの機會に多少目立つ仕事がそれ等の團體に依つてなされるといふことがないでもない。併しそれはそれ等の團體が存在する以上手を束ねてゐることを許されないやうな場合——即ち手を束ねて傍觀してゐると云ふことは彼女等の一番大切な名譽と云ふものゝ價値を割引されるやうな場合—— なのである。だから決してその團體の事業としてのみ見らるべき性質のものではないと私は思ふ。例へば戰爭がはじまる、慰問袋を造つて兵士達に送るとか金を出すとか飢饉に際して金をとか品物を送るとか云ふことは普通の人にも氣のつくことであつて敢てそれ等の團體がこと／＼しく大騒ぎをしなければならない程のことではない。これ等は一つの臨時の仕事としての價値しかない。戰爭がはじまつた時に繃帶を卷いたり慰問袋をこしらへる爲めにのみ、ふだんからさういふ團體の用意をしておく

こ云ふのは手まはしがよすぎて無駄なことだとしか私には思はれない。

若しも眞實にそれ等の婦人連が公共事業と云ふものに對して興味をもち働く心があるのならば寧ろさういふ臨時の慈善事業は自家のそれ〳〵の仕事として充分である。もつと社會には暇と金とを持つ人が眞意をもつて無酬で働かうと思へばどのやうな仕事でも待つてゐる。眞實に彼女等が自分たちの暇と金とを利用して社會の爲めに働かうと思へばぢつとしてゐられない程いろ〳〵な處から手招きされるのが見えるに違ひない。

處が彼女等の第一の自己に對する信條は貴婦人だと云ふ自負の心である。彼女等は自から高く社會の上位にあるべきものだとの心をかつて忘れたことがない。彼女等が多くの人に向つて與ふるものとは唯々物をほどこすと云ふこと以外の何でもない。彼女等はそれを自分の位置に附屬する一の義務として——稅を拂つてゐるつもりなのである。この場合彼女等の所謂慈善は彼女自身をも他の者をも侮蔑する最も傲慢な態度である。彼女等は教養あり思慮ある人々と見做されてゐるがその實は彼女等は社會と云ふものに就いての——もつと深い意味で云へば人間の生活と云ふもの〻根本義について全く無智である。傲慢と無智とは何時も道連れである。彼女の場合もまた其樣である。彼女等のわづかな物質的の補助がそれ程多くの人を幸福にしてゐるか？　彼女等は得々として如何にも大なる善行をし

たかのやうな顔をしてゐる。併し肉體的の一時の滿足が人間の幸福のすべてではない。あまりにそれは複雜な人間の生活を無視しすぎる。

私は可なりの立派な後援者と會員と財源をもつた一公共團體の事業が行はれてゐるのを知つてゐる。其處には幾人かの兒童が引きとられて養育されてゐる。併し私はそれ等の子供達の生活を他所ながら見る度びに子供たちの爲めに悲しまずにはゐられない。もとより出資者たる團體は慈善を標傍してゐるのではあるがたゞ例によつて會員は會費をおさむると云ふことをもつて慈善が完全に行はれてゐるかの如く考へてゐる人達である。時々は華々しいバザーや音樂會も催す。そして彼女等はその團體の一員であることを誇として得意になつて働いて金を儲けて基本財産をふやす。もとよりその役員なる婦人たちは一かどの立派な世の讃美の的になる、彼女たちは自分の仕事に對して充分滿足である。そしてそれ等の金によつて若干の子供たちが養ひ育てられる。けれどもその金の功能が子供たちの上に果して和らかに注がれてゐるであらうか？　子供等の保姆は雇はれた事務員である。彼女等は月給を貰ふ爲めに、子供の世話をする。彼女等は雇主の恩を讃美する。雇主と雇人の間には相變らずな傲慢と媚以外の何物もない。雇主の傲慢に對する無智な雇人の反抗は小さなみぢめな子供たちの上にもたらされる。「他人の慈愍によつて育てられる」多くの可

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

妄想な子供たちのためにあらゆる侮蔑が降りかゝつて來る。成程彼等は慈善家の手に救はれなかつたら或は滿足な着物であつさ寒さをしのぐことが出來なかつたかもしれないし、三度々々御飯にありつけなかつたかもしれない。併し乞食をしてひもじい目にあつても彼等はいたましい涙をより少く流したであらう。若しもこれ等の可憐なる子供達の保護者をもつて任ずる貴婦人達に、眞實に子供に對する憐憫の情があるならば子供はさまで不幸ではないかもしれない。もう少し周到な保護者の注意があれば子供はもつと丁寧にあつかはれなければならない。不徹底な婦人達の態度は慈善が却つて子供たちには呪はしいものと思はしむるであらう。

彼女達は悧巧らしく自分達の兒女の教育だとかその幸福については立派な意見を述べてゐる。しかし不幸な同情すべき子供たち——自分たちの保護の下に育つてゆく子供たちの上にまで同じ考へを向けてやつてゐる人か果して一人でもあるであらうか。恐らく彼女等はその子供たちがどんな待遇をうけつゝ育つてゐるかさへも見に行くひまは持たないであらう。

要するに彼女等の慈善は虚榮の爲めの慈善である。事業の如何は問題ではない。自分の存在がすでに彼女等の滿足であり誇りである。その上にその財產の一部をもつて仕事をする

と云ふことは更に大した仕事でなくてはならない。彼女等は眞實に自己の心の中に起る憐憫や慈悲の心によつて仕事をするのではなくてたゞ外見の爲めに、自分の位置の爲めに、この讃美と尊敬を強いるべくひまにまかして事をするのである。その最後まで意志が徹しないのは無理もないことゝ云はねばならない。まして傲慢な彼女等にその方便としての事業に興味や熱情を求むることは愚に等しい業でなくてはならない。彼女等には、すべての事をなすに尤も大切な誠意と云ふものの缺けてゐることがそれ等を救ふことの出來ないものにする。彼女等が所謂名譽職の爲めに内訌を起したり種々な紛亂をおこしてゐるのは無理もない話である。私は寧ろ彼女等が外見の爲めの慈善などを看板に集まるよりももつと彼女たちにふさはしい氣のおけない集まり方をして彼女の最も手近かな事柄からさきに考へたり研究したりしてもつと眞面目なそして自然な立場から日常生活の形式やその他婦人の手にまつべき種々な家庭の仕事について社會に模範を示すことがどの位立派なことか知れないと思ふ。不徹底な表面的の仕事はやゝもすれば虛榮心を誘き出したり傲慢にする。事業と云ふものは誠意と熱情とを缺く、ことに狹量なものには出來ない筈である。現在の我國の上流婦人にして多くの婦人連の團體の首腦にならうとするやうな人の間には眞實に事業に興味をもつてやらうと云ふやうな人は先づないやうに思はれる。何時もこれ等の公

共事業は献身的な熱情をもつたすべての事に向つて飛び込んでゆくやうな婦人でなくては出來ない。

前に述べたやうな種類の團體とは少々色彩を殊にした婦人の團體が他に一つ二つ存在する。それは宗敎に依つて――信仰によつて團結を一つにする團體である。そしてその宗敎の信條によつて公共的な事業をしてゐるのである。

これは前述のに較べては誠意も熱情も充分に持つて他人に對する情緒も美しいものが見られるし事業と云ふものにも眞面目であり徹底的であるらしく見える。然るに、現在のどの宗敎にも同じ弊として見られてゐる缺點は敎義の固定――云ひかへればその敎義が極端に形式化し!!惰化してゐることである。これが爲めに、眞の敎義が往々敎職にある人々にさへ誤解されて傳へられる場合すらあると云ふ一事である。その敎義をもつて社會に起る百般の事柄にあたつて行かうとすれば必ず矛盾を見出すことになる。もし眞にその敎義の主點を理解してゐる者にとつてはさまで困難も窮屈も感ずることはないがやゝもすれば形式化した寺院や敎育會の空氣はそれ等を異端視するものである。彼等はたゞ形式によつてのみ行かうとする。だから彼等は不自然なことにばかりゆきつく。そしてその不自然を墨

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ぶ大なる苦痛をもつて教義に對する忠實の證明にしやうとする。

右のやうな傾向をもつた宗教の中にあらゆる信を、熱誠をもつてかけてゐる婦人の心はその形式に向つて寧ろ頑迷に見ゆる程度にまで固執する。この宗教家の婦人の偏狭はやがてその社會的の事業に向つたときに著しい缺點となつて諸人の反感をかふことになるのである。

基督教徒たる婦人の大半は教養ある人々である。そしてもつとも「高尚な精神」と云ふやうな事を口にする婦人たちである。しかるに私の目から尤もキザにして輕薄な僞善的階級に屬する婦人はこれ等の人の中に最も多く發見する。彼女等は謙遜らしく振舞つてはゐるが實は非常に傲慢で寛大らしく見えて實はもつとも狭量で偏屈で苛酷である。一番彼女等が不用意にさう云ふ缺點を現はす場合をあげて見ると彼女等がその宗教の教徒以外の人に對する時である。彼女等は、先づこの宗教の有がた味を知らぬ者に對して可愛想だと云ふ。不幸だと云ふ。そして導き入れやうとする。それが未だ宗教を信ずることを知らぬ者であつたときには當然のことではあるが反對に既でに何等かの信條を自分で把持して立派に宗教をもつてゐる人に對してすら彼女は彼女たちの神様をしらぬ者はかあいさうだと云ふやうなことを云ふ。併しこの場合は彼女は自省を缺いてゐる。そして相手を侮辱してゐるの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

である。既でにそれさへ他人の信仰を侮辱するものであるのに猶その信仰をすてさせて自分の信仰に絶對の權威を認めさせやうと努力する。もしそれに反對し、多少ともに彼女の虚をでもつかうものなら彼女は全く思慮を失ひ敎義も忘れ、相手に充分の敵意を含んだ輕侮を示して冷笑する。而も彼女は表面丈けはきはめて寛大さを示さうとする。併し彼女の心は決しておだやかではない。何かにつけて彼女たちは神樣を讚美しては序でにきつと異敎徒の惡口を云ふ。彼女たちは異敎徒の惡口は寧ろ當然で自分の神樣を賞めてさへゐればそのつぐのひはつくやうに思つてゐる。これは婦人丈けでなく男子にもさうであるのは事實である。併しこれは萬人を等しく愛する神の目からは許しがたい事實であるに相違ない。しかもこれは基督敎徒の人々のみの場合でなくすべての敎徒に等しく云ひ得ることであるが最も敎養あり見識ある基督敎の婦人たちの著しい半面であることも爭はれない事實である。

　さてかういふ婦人連の團體として尤もその偉なるもの丶一例を擧ぐれば「婦人矯風會」と云ふ會である。この會は人道とか、社會道德とか云ふ方面に向つてその事業を發展さして行と云ふ主義の上から可なり社會の表面に出てゐて事業と云ふものも他の所謂貴婦人連の團體から見ればずつと實際的である丈けに會員の多くが興味も持ち力も主としてその方面

に注がれてはゐるらしく見える。併し實際に於いては決してさうではない。貴婦人達の單純な誰にも分る虛榮心からの事業經營とは非常にかけはなれて立ちまさつて見えながら彼女達が事業經營といふものから得やうとするものは同一性質のものであつてや丶一般の目からは複雜に見える丈けのものである。彼女達も矢張り事業そのものに興味をもつのではなく事業經營者としての自己を、より多くの人に知らしめたいと云ふ名譽心で、さう云ふ團體の存在を社會に認めさせるやうな經營方法をとつてゐる點に於いて他の團體と少しの差異をも認められない。若し彼女自身の名譽心と云ふ言葉が彼女を侮辱するものであるならば彼女の宗教の爲めに——と云はうか。それでも少しもちがひはないけれど。要するに事業の爲めの事業ではなくて手段の爲めの事業である。殊にこの團體により多くの同情を失はしめる理由は彼女等の宗教的偏狹である。彼女等は殆んど人間性と云ふものには全く盲目であると云つてもよい位である。彼女等は形式化した愚劣な魂のない宗教の信者の常として全く融通のきかない杓子定規の上に凡ゆる信をおく迷信者である。彼女等の信仰が度を高むる程彼女等の人間らしい情緒は削がれ狹められ壓しつぶされて行く。さうして次第に彼女等は神の最も尊き本然の意志——乃ち愛から遠ざかり寛容を忘れて遂に小さく狹き高慢なる最も神に遠い人となるのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一例は此度の御大典にあたつて可なりの問題となつた藝娼妓の奉祝と云ふが如き事も彼女等の態度を遺憾なく現はしてゐる處に私は可なりの興味を持つ。

「賤業婦」と彼女等は呼んでゐる。私はそれ丈けで既でに彼女等の傲慢さを、または淺薄さを充分に證據だてる事が出來る。

社會百般の事象がたとへどんな微々たる事象にもせよ、それが表面に現はれて來るまでには必ず確たる根を持ちある立派な自分丈けの相當なプロセスを持つてゐるものだと私は思ふ。殊にそれが人々の間に一つの社會問題として認められ取り扱はれる事柄のすべては僅かばかりの力では動かすことの出來ない根を持つてゐるものと見なければならない。また歷史を持つてゐるものと私は思ふ。時間とか空間とか云ふことについて私達は間々その僅かな斷片の價値しか目前には見えない爲めに可なり馬鹿にするやうな心持を持つことがないでもないが、實は偉大なる自然力の最も力强い支配の下にある不可抗力である。それは到底わづかな人間の意力や手段では誤魔化せない正眞正銘のねうちを失ふことのない力である。そしてこの位の事柄は誰でも百も承知の上でなくてはならない。若しも彼女たちの云ふまゝにあの花柳界の女たちのしてゐる事が賤業であるとしてもあゝした業が社會に認められてゐるのは誰でもが云ふ通りに矢張り男子の本然の要求と長い歷史がその根を固いもの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にしてゐる。それは必ず存在する丈けの理由を持つてゐるのである。彼女たちがたとへ六年間をちかつたとて十年間をちかつたとてそれを全廢すると云ふことがどうして出來やうつ？　けれども彼女たちはかう答へる。「ですからさう云ふ種類の商賣を全然なくしやうとしたつてそれはとても駄目だと云ふことは知つて居ります。ですから私たちはそれを根絶させやうと云ふのではありません、ただ公然とあゝした商賣があると云ふことは日本の國家が外國に對してはづかしい事ですから公娼だけを廢止させたいのです。」と。私はこの不徹底なお悧巧な議論をとても眞面目で「左樣ですか」と云つて感心しては聞いてゐられない。公娼は外國人にみつともなくて私娼はみつともなくないと云ふ理屈が果して成り立つであらうか？　理屈はとにかくとしてみつともないとか見つともなくないとか云ふことがあの婦人達の唯一の論據であるなら私はその愚を笑ふよりも寧ろかなしまずにはゐられない。彼女は外國人に對する外見の爲めに事業をしてゐるのであらうか？　公娼制度が恥かしく私娼制度が何故に恥かしくないか？　私はかゝる些々たる彼女達の辯解に多くの矛盾がまづはりついて彼女を苦しめてゐることを感じないではゐられない――若しも彼女が本當にそれだけの理由で云ふのならば――。だが彼女達のこの問題に對する態度をたゞこれ丈けの根據を持つて觀ることは出來ない。彼女たちは所謂「賤業」を營んでゐる人達の「賤

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

業」が社會の風俗を亂すからと云ふことを一方に何時も云つてゐる。で私は思ふ。もしもそれをも彼女たちのモットーとして見るときには前の辯解との間に何をもつて連關させるか？　私の考へでは公娼よりも私娼は一層その社會の風俗を亂すことになるであらう。不幸なこの商賣につきものゝいまはしい恐るべき病毒の傳染と云ふこと、それから世間の士女をたやすくさういふ商買に導き入れると云ふこと、一寸考へた丈けでもよほど社會に惡影響を及ぼす力は私娼の方にありさうに私には思はれる。これは私の粗笨な頭で一寸かんがへた丈けのことでその實もつと公娼の方にたいした惡いことがあるのかもしれないけれど、其處で此度は私の頭には社會に貢獻すると云ふ趣旨からまたは矯風會と云ふその名前の意義にまで遡つて考へて見て外國人にみつともながられてゐるのを――實は外國人はみつともないとも思つてゐはしないのかもしれなくてあの婦人たちが推察でさう思つてゐるのかもしれないけれど――さう思はせないやうにするのと、それを第二の問題として先づ日本の社會の内味をなるべく奇麗にするのとは社會の爲めにどちらが本當の貢獻でせうねと聞いて見たい。蟲のいゝ婦人達は私たちは雙方いゝやうに働きますと答へるであらう。そして私は冷笑を捧げるであらう。矯風會の會長は明らかにこの事實を承認してゐるのである。私はそれを知つてゐる。彼女は私娼がより多くの害毒を流すと云ふ事實を認むること

をも人に語りながらなをかつ吉原の存在が――吉原と云ふ一廓をなして公然と商賣をしてゐると云ふことで――外國人に對する屈辱として全廢を主張してゐる。猶も彼女たちの心理を疑はしむるものは、賤業を營む分際として普通の家なみに軒をならべて附近の士女によからぬことを敎へると云ふ不都合をなしながら、それも外見の爲めには忍ぶべしとするにいたつては私は最早云ふべき言葉を持たない。彼女等の事業は徹頭徹尾虛榮の爲めであると云ひたい。社會への貢獻とは社會に認めることを强ひる爲めの誤魔化し手段と見做すより他はない。彼女等は殊更に六年間をちかつて公娼廢止を實現させると社會に公表した。それが果して出來得るか否かは甚だしい疑問である。社會がその公表に一時にしろ耳をかたむけた事だけで會の存在を認めさすと云ふことには成功したのだ。併し私はそれで濟めば笑つてもゐられるけれども若し彼女たちの六年の努力が公娼を廢止さした場合に彼女達の努力はえらいにちがひない、そして社會はそれに眩惑されるだらう、矯風會の功勞は感謝されるであらう。併し私は眩惑されはしないつもりである。彼女達は知りながら自分達の爲めに、自分たちの力を信じさせてほこる爲めに社會に貢獻すると口にしながらまちがつた努力は社會の幸福を犧牲にするのだ。勿論私は公娼の存在も私娼の存在も決していゝ事だとは思はない、けれどもこのやうな日の來ることを願はない。若しも彼女たちが眞實

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に社會の爲めを思ひそれに貢献しやうと思ふならばそして功利的な心がないのならばそのやうな表面に出て不徹底な理屈をならべるよりもむしろ長い未來の爲めに土臺石となる堅實な意志と謙讓な心持を持つてその目的に向つての生き甲斐を見出すのが當然の態度であらうと私には思はれる。すべての社會問題にたづさはる人はこの志がなければ到底駄目だと私は思ふ。目前の功利にばかり汲々してゐるものに本當にその人が渇仰してゐるやうな永遠の名譽は決して與へられるものではない。併し私は何方を向いてもこの謙遜な態度を持して眞に自分を把持して仕事をしてゐる婦人をあまり見かけない。婦人丈けでなく男子でさへもさうではあるが。私が先づ彼の矯風會の人たちに望みたいことは、さうした大きな問題として現はれたものを對象にするよりももつと根本的なたとへば第一に敎育と云ふやうな方面に閑却されてある大切なことが可なりあると思ふ。さう云つた方面から眞實に貢献して欲しいと思ふ。社會に貢献することを看板にしながら社會の幸福をぬすむやうな誠意を缺いたことをして貰ひたくないと思ふ。公共事業と云ふからには本當に公共の爲めにやつて欲しい。

傲慢な者は何時でも自省力を缺いて居る。併し彼女たちが考へることの出來ない程ブアな頭をもつてゐるのではない。彼女たちは充分聰明であり思慮もある。何が彼女をそんな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にも傲慢にするか？　それは彼女等の間違つた自負心である。彼女達が物を觀たり考へたりするときに彼女たちは何時の場合にでも自分を標準にして考へたり觀たりする。その癖彼女たちのすべての事象に對する智識が申し分なく行き屆いてゐるかと云ふに彼女等は決してさうではない。一人の女が生活難の爲めに「賤業婦」におちてゆく。それを彼女たちに云はせると何時でも考へ方が足りないとか、無智だからとか云つてゐる。成程それに相違はないが彼女たちはその可愛想な女の無智な苦悶やそこにまで考へのおちてゆくプロセスも考へず、一概にその無智を侮蔑するやうな傾きをもつてゐる。もしも彼女等が本當に「賤業婦」たちを可愛さうに思ふならば、今それを「止めろ」だなどゝ云ふよりもその無智な女たちが物を正しく解することの出來るやうな方法を講じてやるがいゝ、その方がどの位立派なことだかしれない。若しも私が彼女たちに向つて私の純な個人主義的立場からこの問題を論ずるならばその私の議論の前では團體とかその事業とか云ふことさへ存在の價値を失くして見せることが出來るのだが私は、今それ程までには論せずに置く。「賤業」と云ふ言葉に無限の侮辱をこめて彼のバイブルウーメンが「一人々々の事情については可愛さうに思ふが――」などゝ他聞のよささうな事を云ひながらまだその「賤業」と云ふ迷信にとらはれて可愛さうな士女を人間から除外しやうとしてゐる。それ丈けでも彼女たちの身の程知

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らずな高慢は憎むべきである。まして彼女たちは神の使徒をもつて自から任じてたつ宗教婦人ではないか？　博愛とは何？　同情とは？　友愛とは？　果してそれ等のものを與へ得る自信が彼女たちにあるか？　恐らく彼女たちの全智全能の神キリストは彼女等が彼の名を口にしつゝかゝる偏狹傲慢の態度をもつて人の子に盡すことをかなしんでゐるに相違はないと私は思ふ。

いくら繰り返しても限りはない。私はもう筆をおかう。たゞ最後に、もう一度云ひたい。私達日本婦人が何故かう高慢で、偏狹であるかと云ふことだ。「それは深く物を考へないから」と私は答へたい。彼女等は自分のわからない事に出會すと自分でそれを考へやうとは決してしない。直ぐ他人の處に相談として持込んで他人のいゝ加減な意見をきいて批判も何にも一切ぬきにして直ぐそのまゝそれを自分の考へとして取り入れてしまふやうな輕々な風がある。そうして自から考へ處決しやうとするけなげな者に向つて却て高慢だとか生意氣だとか云ふ嘲笑をあびせる。これが一番大きな缺點だと私は思ふ。本當に物の根本をひとりで考へる程人間はずつと謙遜にならずにはゐられない。世間に起る出來ごとのすべての背景をなしてゐる大自然の偉力と云ふやうなものに目をつけるやうになれば如何なる人間でも自分の微少な力をふりかへらずにはゐられない。そうして最も眞面目な自分の道

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふやうなものが見えるやうにならねばうそだと私は思ふ。

願はくば我日本婦人の一人でも多くがこの境地にまで自分を引き出してゆくことを切にいのる。そうして私はさうした日の後にはじめて起る一人々々の心の底からしみ出した立派な意見のもとに堂々たる事業のはじまるのを待つ。現在の日本の婦人の公共事業はすべての點において最も明かに日本婦人の缺點を露はしてゐるものであることを公言するに憚らないのである。

まだ私としては充分に何物をも云ひつくせない不滿があるが他日また稿を改めて詳しく書いて見るつもりで一と先づ筆を措く。若しもこの不充分なる一感想に對してゞもお氣づきのことがあれば私は何時でも喜こんで御說を拜聽するものであることを附加して置く。

——(四、一〇、六)今宿にて——

兒童の世紀

山田わか

――エレン、ケイ著――

第壹章

兒童の兩親を選擇する權利（四）

男は大飲する事によつて次の時代へ大なる罪惡を殘すのみならず、其の他多くの關係に於て多大の破壞的素質を殘すものである。

けれども婦人計りでなく、男子の良心も追々目醒めて來たに違ひない。これは男子等が惡質を遺傳する恐れがあるのを知る時には結婚を避けるやうな傾向がある處にも現れて居るし、又次の例に於ける如き道德の範圍内にも、よく現れて居る。

或る一人の醫師が自分は健康體であると信じて結婚をした。けれども彼は後に其れが誤りであつた事を發見した。で、彼は、其のまゝ結婚生活をつゞけて、健康な妻を害するか、或は愛する彼女と別れるか二つに一つを選ばねばならなかつた。彼等は深く相愛して居た故に、別れるより外に方法はなかつた。そこで彼は死を選んだ。けれども彼は怪我で死んだと、妻に信じさせるやうな方法をもうけて遂ひに自殺を遂げたのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

又或る一人の人は結婚をして三人迄も子を持つた後に、其の妻は自分の腹違ひの妹であると云ふ事が解つたので此の人も亦自殺をした。

　けれどもこれ等の出來事は、前述した二婦人の場合と同じやうに極めて稀に見る例であつて、一般婦人が、心身の不健全な男子は我が子の父にはせぬと云ふ意氣を彼等の抑へきれぬ本能と迄、發達させるには未だ何代かを要する事であらう。此の方面に關する男子の本能は婦人のよりは遙かに强いものである。けれど、それも古い法律上の概念のために大分鈍らされて居る。其の概念に從へば、婦人は心のうちでは全然背いて居る要求でも、義務として服從しなければならぬのである。此の點に付いてこれからの婦人は一つの明白な義務を持つて居る。則ち彼女は我が子を、純潔な愛、健康、相愛、完全な意志の一致、完全な共通の幸福のうちに、生まねばならぬ。このうちの一つでもが缺けて居れば彼女は德義上の罪を犯した事になるのである。これを婦人が婦人の義務として認める迄は、此の地球上には、一時の快樂のために生涯の幸福及び效力を破壞するやうな人類で滿される事が續くであらう。そう云ふ人類は時とすると既に幼年時代に於て墮落或は不調和の徵を現すが又時とすると、彼等は永い間完全なる健康體で强壯な人類の標本であるやうに見ゆる。が或る危急な場合に出逢つた時に、彼等は彼等の出生の折りに原因して居た心身の活力の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

不足がもとゝなつて再び起つ能はざるやうな事になるのである。

健康な活動的な個人の間に取り結ばるゝ結婚には法律は無干渉である。唯倫理のみ人類改善のために或る影響を與へる事が出來る。

兒童は幼少の頃から、彼等の存在に付いて、又將來に於ける、彼等の男子としての、女子としての義務に付いて敎へられて居らねばならぬ。父母は兒童の良心の上に、純潔と云ふ無形な概念ばかりでなく、のつぴきならぬ方法を用いて、貞節に付いての確かな命令を與へて置かねばならぬ。かくして、彼等は自分を愛する人のために、又其の愛から生れる子供のために、彼等の健康と純潔、及び牽引力を保つ事が出來る。

モーパサン、トルストイ及び他の詩人等が全く別々な見地から描寫した如く、種族繼續の衝動は人類を下等な、矮小な、笑ふべきものとする。

けれども其れは其の刺戟が自然の與へた目的に無關係である時、即ち健全な子をもうけると云ふ事に關しては何等の思慮もなく、偶然に其の目的に達した場合に於てゞある。生命の創造者としての個人の價値を貶すやうな種類の愛は人生を攪亂するものである。かやうな愛は實に人類を破滅に導く。そして生命の增殖を歡迎し、人類の絕えざる向上を希望する近世の人生觀から見ても、其れは大なる不德である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

若き人々は彼等の未來の義務を尊敬するやう學ばねばならぬ。もし、彼等が責任の價値を認める事もなく、貞節の心掛もなく、無考へに、結婚をしたり、離婚をしたりして、心身の本分を浪費するならば、彼等は此等の義務には無感覺になつてしまうのである。彼等が又忘れてはならない事は、たとへ世間普通の動機の上に出來た結婚であれ、或は又不斷和を子供に遺傳するやうな舊道德によつて維持さるゝ結婚であれ、彼等が冷淡な心で子を持つなら彼等は彼等の義務の大なるものを犯したのであると云ふ事である。

若い時の空想及び理想的確信を度々破られたゝめ、冷淡に、無頓着になつた母は、彼女の子供の愛の純粹な本能、貞節、强き感情及び高遠な目的などと度々衝突する。そう云ふ母は子供に敎ふるに、愛は規則として結婚に終るものであるから、結婚するに愛はなくとも差支へはないなぞと云ふ。此の考へ方は、丁度、船は海の上へ出れば、どうせ何かしら破損を受けるものであるから、いくらかの缺陥はあつても出帆するに差し支へはない、と云ふのと同じ事である。

彼等は官能の不純に付いて、又友情及び道理に基礎を置く結婚の利益に付いて、或は又苦情を押へる義務の力に付いてよく論じるが、これは凡て冷やゝかな理論の過程であつて、生命の溢れる魂を殺すものである。娘等は輕率な行動を避けるために、又彼等の感情

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が不確かである時其れを識別するために、彼女達の母から拔目なく精細に躾けられねばならぬ。もし、相互の愛からでなく他の理由の上に彼等が結婚するならば彼等は最早墮落したものだと云ふ事を彼等は彼等の魂の上に、又精神の上に燒付けて置かねばならぬ。此の信仰が出來て始めて現代の道德の標準に大變化が起るであらう。人は次のやうな事を考へがちのものである。結婚はどうしてゞも出來る。動機の如何を問ふ必要はない。義務の觀念からでもよし、約束があるなら其の約束を履行するためでもよし、又以前の何かの罪を贖ふためでもよい、或は又家庭生活がして見たいのなら、愛はなくとも結婚する權利はあるなぞと。こう云ふ事柄を正當と見る人の道德の標準は、以前に盜みをしたから人殺しをする、空腹であつたから盜んだのだと云ふのと大差ないものである。人生の最も感じ易い範圍、則ち無數の玄妙な勢力が子孫の運命を支配する其の範圍を、人が專斷に處置し得ると信じる時、其れは子孫の神聖に對して大なる罪惡である。

義務と云ふ冷たい空氣の中に、又不和と云ふ荒れた空氣の中に、子供の生まるゝ事が續く間は、又かやうな結婚を人が道德にかなつたものと思ひ、毀損された智識と不完全な肉體とを子供に遺傳して、そして其等の兩親が誠實な人として崇敬されて居る間は、世界の上に新人類を造り出すやうな新道德の概念は少しも現れぬであらう。

此の舊道德は今猶一般には稱揚されて居る。けれども今日の若い婦人は無意識のうちに結婚するやうな事はない。私の若い時分には、花嫁の無意識は彼女の精神錯亂に結果したり、自殺になつたり、生んだ子を冷淡に見るやうになつたり、病的な心理狀態の子を生むやうになつたりした。けれども婦人が彼女等の目前に迫まつて來る事柄が何であるかを一般に知るやうになつたからとて、其れで美しい理想的結婚に、又調和ある子供を生む事に充分ではない。『大抵の男子は彼の最初の愛を墮落した婦人に經驗して、そしてそう云ふ所願の婦人の見解と習慣とをもつて新妻に對するから、大抵の結婚は其の始めに於て既に損はれて居る。であるから夫婦の間の最も細やかな愛情なぞは永久に滅絕して居る。そう云ふ男子は相互の感情に於ける最も美しい要素なぞは破壞してしまつて居るのである』と或る青年が私に話した事がある。實に男子は尊敬と忍耐を持つやうに修養しなければならぬ。私は此の尊敬と忍耐を感る男子に見た事があるが、其の人はその妻が官能の目覺めのない前に彼女の靈と心を彼に與へて居つた事を知つて居たからである。唯絕えず接近して居ると云ふ事のみが、彼等に完全な結婚の慾望を起さしむるものである。此の完全な結婚則ち共通の衝動を通じてのみ、子供は生るべき筈のものである。多くの子供は恰も公娼に於て、又法律の保護を受けた强姦に於て生れて居る。多くの男女の良心のうちには人生の最も大

なる神秘に對して少しの宗敎的の尊敬心も、審美的感情もない。人は道德の名のもとに、青年に對して自然の本當の姿を秘して居る。そしていつかは人生の神秘を成就さすべき嗣としての彼等自身の人格に對して、彼等に獻身的の感情を靈感せしむる事を、人は等閑に附して居る。

此の神秘のうちには直覺でなくては分らない處がある。深奧な詩人は此處其處に無數の親和力及び反撥力を推量して居る。此の親和力と反撥力は、變りつゝある精神的、物質的の性質及び變りつゝある輿論のもとに、現代人の愛の生活を變更する。そして此の親和力と反撥力は、時としては永久に時としては一時的に最も深い感情を變へて行く神秘的な勢力である。此等の精緻な織き絲、則ち此等の神秘的勢力が子供と云ふ生きた織物の一部分となるのである。此の玄妙な過程が、外界からは全く同じ狀態のもとに同じ兩親から生れて養育された子等の間の大なる性質の差を說明して居る。

本能の凡てのこれ等の鼓舞に、又神經と血のこれ等の直言命令に、人類は柔順に服從しなければならぬ、と同時に又其等に對して嚴格な支配者であらねばならぬ。愛の未來の幸福は此愛から始まり、幸福な未來の人類はこれより來るのである。

現代人は傳來道德と其の道德を破壞して得た新道德のもとに生活して居る。愛に於ける

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

感性及び官能が一致する前に、換言すれば男女間の唯一の道德的基礎として此の一致が認められる前に、人は此の新術の道德に超越して居なければならぬ。

才能のある人、並びに婦人の權利を偏頗に左袒する人々は、愛の基底である低級な衝動が科學的に分析され赤裸にされたならば愛の發達は全く異つた進行をとるであろう、と考へて居る。彼等は云ふ。優れた人々は彼等の感情を飾る事なく無遠慮に、動物的に、彼等の衝動を滿足させるであろう。さもなければ彼等は其の衝動の影響からは獨り離れて、愛によつて消盡される其の活力及び情緒の力を、他の高尙な目的のために專心用ひるであろうと。

此の見解のうちに不可能と思へるものはない。婦人は母たるの作用を行ふために多大の生理的、心理的の精力を費す故に彼女の智的產物は重きを置かれるものではない事を、私は幾度もくく指摘して置いた。私が若年の頃直覺的に假定して置いた其の事を後に專門家が證據立てた。或るフインランドの醫師が、如何に下等動物の活力は生殖のために集中されるかと云ふ事、けれども高等人類は彼等の活力の大部分を生殖に計りは用ひないと云ふ事、又此の子孫を造る事に費されない力は智的產物のために保存し得ると云ふ事、人間活力の此の二方面の生產力の各々が或る範圍迄は他の一方面の發達の力及び能力を制限する

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事、等を明瞭にした。又彼は、これが文明人の生殖力の減少した自然の原因である事、悲觀論者の說に從へば、これが預言された戀愛衰微に於ける有力な要素である事、等を論じた。

けれども此等に反して、私の愛に付いての概念に從へば衝動を比較的弱くする事によつて、又其の衝動を科學的に分析する事によつて却つて愛は勝利を得るものである。人は最早や愛と衝動を取り違へるやうな事はしない。勿論愛のうちには始終此の衝動が存在する。けれども其れは、大古に於ての穴居人の岩に彫つた彫物が、ミケルエンジエロの彫刻物にも現れて居ると同じ意味である。愛が、トーローの趣味ある言葉をかりて云へば、唯赤い光でなく、ものを輝す光になつた時、人は彼の全力をもつて愛する事が出來る。人が有つて價値ある幸福と其の愛がなつた時、何となれば愛は審美的創造であり、宗教的崇拜であるから、又相愛する二人の完全な結合が一ッの新しい生命となつて現れた時、そして其の子供が後に生を受けた事を眞に感謝するであらう時、其の時に於て、人は始めて、如何なる富を人生は愛を通じて持ち得るかを知るであろう。人類の改善を計るには、習慣及び感情の變化が根本的に必要である。法律の影響は其れに比較すると甚だ僅かなものである。けれども前にも云つて置いた通り、法律は又法律の役目を有つて居る。殊に惡質が確かに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

遺傳されるやうな場合には社會は其の結婚を妨止する權能を有たねばならぬ。獨逸及び亞米利加に於ては、此の方面に關して既によき發案が出來て居る。其れば結婚の義務的條件として兩當事者の精密なる健康證明書を法律が要求するのである。勿論個人は選擇の自由を有つて居るのだけれども、今日の習慣であるやうに、事情を知らずに結婚して、彼等自身、並びに後に生れる子供が不幸に陷らないやうに法律は干渉するのである。徵兵に身體檢査が必要であると同じやうに結婚の資格に關して健康證明書を得る事は社會のために要用である。徵兵の場合は命を棄てるためで、結婚の場合は生命を造るためである。徵兵の場合は今日迄は結婚の其れよりも嚴粛なものとして見られて來た。けれども漸々と目覺めつゝある社會良心は此の方面の進歩を要求すべきである。これより新しい習慣が追々發達して行く事は考へられる事である。其れ以上の法律の干渉は無益であらう。人類は、あらゆる自由の中の最も危險なる自由、則ち自己の滿足を得るために不具な子供を生むと云ふ、此の自由を斷念しなければならぬ。けれども結婚禁止によつては不健全な子を持つ事を制限出來ない。何となれば群集は結婚外に親となつて、子供から可能な健康と幸福を奪ふであらう。彼等は心身の惡質を子孫に負はす事を、猶、續けるであらう。

婦人を知らない故に、從つて戀愛の經驗なぞを有たないニイチエの此の問題に關する說

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は注意する價値の少ないものであるが、それでも彼は兩親の義務に關しては同時代の誰よりも深刻な意見を發表して居る。彼は、結婚の名のもとに如何なる不純、如何なる貧弱がかくされてあるかを見た。彼は教育が如何に無主義で卑劣であるかを見た。彼は彼の述作の中に、豫言的な詩的な言葉で親たる目的、又眞の親とは何であるかを說いた。

我は望む。汝の勝利、汝の自由が子のためにあらん事を。汝の勝利、汝の自由の生きた紀念碑と汝の子をなせ。

汝は汝以上の子を造らざるべからず。されど我汝に云ふ。かくなさんには先づ第一に汝の心身を確實なる基礎となさゞるべからず。

汝は單に人種の繼續者たるなかれ。汝によつて人種を向上せしめざるべからず。

眞の結婚をして此の目的の援助者たらしめよ。

汝は自ら廻る車の如き、自動力ある、一層高尚な人物を造れ。則ち汝は創造者を造れ。

一ツを創造する二個の意志を我は結婚と云ふ。創造された一ツは其の創造者なる二個よりも偉大なるべし。相互ひの尊敬、則ち相愛すると云ふ一ツの行爲により二ツの意志を結び付けるに適する尊敬を、我は結婚と云ふ。（第一章終り）

短歌十首

與謝野晶子

大阪の人某氏、延若と改名せんとする俳優延次郎に贈る歌を代りて詠めと云ひければ。

わが若き延次郎の名の惜しきこと限りもあらずきはまりもなし
戀男紙屋治兵衛の頬かぶり治兵衛が惜しや名をば變へやる
加茂川の夕涼みにも千鳥きく冬座敷にも延次郎話
西京の舞子のむれの美しさそれに適へる役者延次郎
延次郎ののぼりなびかぬ南座はすさまじかりき圓山のもと
木屋町の宿屋はよしや延次郎の樂屋太鼓の音のひびけば
聲いろに延次郎出せばその顔をすだれかかげて覗く舞姫
とことはに京の舞子に見はやされ老ゆることなくあれ延次郎
福助になまめかしさの及ばずと舞子はしらずよしや延次郎
かの人もいかにかなりし延次郎に顔の似たりし女ともだち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初戀のなりゆき

岡田八千代

七

けれ共多勢に無勢で、ともすると私達はよくうつかりと運動場に立つてゐる處を女生の一團と男生の一團とが手をつなぎ合したうづまきの中などに取り圍まれる事などがありました。そんな時には次郎さんは直ぐにいつかの櫻の大木の處に走けてゆきました、そしてその木につかまつて倒されないやうにしつかりと立つてゐました。いつも逃げてしまはふと思ふ私も大きなうづまきの爲めに遂には其處まで追ひ込められてしまつて余儀なく二人は人々の嘲りの的にならなければなりませんでした。けれ共次郎さんも私もその爲めに泣くといふやうな事はありませんでした。二人は互ひに櫻の幹を支へにして面白がつて叫き散らす人々の顏は見ずに、ひし／＼と人のくさりに取り巻かれて痛いのに堪へながらもぢつと一ト處を見詰めて立つてゐるのでした。さうする中には人々もやがて興がさめて散つてしまふのが例になつてゐたのですが、私は何となくその苦痛を逃れた後は本意ないやうな心持でした。次郎さんも時折「またうづまきがあると好いねえ。」

などゝ學校の歸りに云ふ事などがありました。そのくせ二人共に、よくその爲めに煩や手などを櫻の幹の荒い皮の爲めにすり剝く時などもあるのでしたが、そんな事は互ひに只苦しくて樂しい一つの思出になるのみでした。その頃はよく學校の便所の羽目や通學の道の板塀などにも私達二人の名はみだらな文句とともにたえず記されてありました。次郎さんと私とはよくそれをたんねんに消してあるきました。そして二人はそうした卑しい誘惑には少しも犯される事なしに只淸らかな細かい友情の中に一年の年を經てしまひました。

その時、突然次郎さんは町の中學校へ移つてしまつたのでした。私はどんなにがつかりしたでせう、丁度夢中になつてつきかけて居た手鞠を不意に取り上げられたやうなあつけ無さと恨めしさとに暫くはたゞ呆然と氣ぬけがして、無暗ともの悲しい淋しさの中に日を暮しました。

それにしても何うしてあれ程仲の好かつた私に一言の話もなしに轉校してしまつたのかしかも噂に聞けば學校が代ると同時に次郎さんは寄宿をしてしまつたらしく、夕方になつて時折その人の家の近所をさ迷つて見ても夫らしい姿も見かけず、只裏さびしい街燈の光が薄白い黃昏の門のとぼそを力無く赤黃ろく染めてゐるばかりでした。

私は學校から歸ると其儘ぢつと自分の室にばかり引き籠るやうになりました。古机と古

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

箪笥と古人形とが僅かにその後の私の友達でした。机は東京へ出てゐる兄の使ひ古しで、箪笥は母の嫁入當時のもの、その中でもたゞ古人形のみが私には懷かしいものでした。

その人形にはもう古けた白茶地へ朱が刹毛染になつた上へ黑い鳥を染めた縮緬の小袖が着せてありました。髮のおちごもいつかそゝけて、狹くしりた糸錦の帶もいつその結び目を解いたとも聞かず塵埃にまみれてゐるのでした。

「お袖ちゃん。」これが人形の名でした。

この人形はいつの誰が持つたものか、もう昔から家に傳つたものだとの事でした。

私は此人形についてこんな夢を見ました。それは忘れもせぬ私が七ツの時の御節句の晩でした。甘いとも思はず過した白酒に醉ひ倒れて私は雛壇の前に眠つてしまひました。近所から呼びあつめた子供達は私が寢てしまつたので一人二人と時の間にみんな歸つて行つてしまひました。

私はフッと目の覺めた心持になりました。そして起き上つてあたりを見ました。父や母は茶の間に居るらしく、私の着た新らしい友禪の着物の腰から白足袋の先へまで、荒い糸織の父の丹前が被せかけてありました。――私はその紫つぽい縞までもまざ／＼と見たのでした。――ふらりと立ち上つた私は何の思慮もなく雛壇の前に立ちました。座敷に洋燈

はありませんでしたが、緋の毛絨にちら〳〵とうつるのは黒塗に牡丹唐草を蒔繪にした可愛い燭臺にともる蠟燭のまたゝきでした。拔けるやうに色の白い內裏樣奧樣の類にも、艶々と灯火の影の明滅して、三色に重ねた菱餅、たかつきに盛つたハゼの花やかに飾られた上段から、中段の月の卷、簞笥長持、お齒黑染の耳だらひ金だらひ、絹行燈や化粧道具、とずつと見下して來た私は、下の段の膳部に並んださいひの側の、大きな花瓶の桃とれんぎやう、室咲は何となくひそやかに花をつけたその下に、誰が持つて來て置いたのか、お袖さんが昔ながらの古小袖に、亂れた髮を梳きあげられもせず、投げだしたやうに置いてあるのに氣がつきました。

八

私は不思議な憐れみの心でお袖さんをぢつと見ました。その憐れみの中には、嘲りの心も悲しみの心も、はた笑ひの心もいつくしみの心も含んでをりました、どの人形にしてもこの雛壇に飾られたものは、みな、髮も顏も衣も艶々と美しいのに引きかへ、お袖さんばかりは髮はそゝけ顏は汚れ衣は色あせて、品こそあれ、見る影もないやつ〳〵しい姿なのです。私は幼な心にも氣の毒さと笑止さに、思はず手を延ばしてお袖さんの艶はあるが薄汚れたその冷たい頰べたをちよいと突いてやりました、（お袖さん、お案じでないよ、私が

愛にゐるよ）と云ふやうな心持で——

するとまア如何したと云ふのでせう、堅い木彫から塗り上げてある筈のお袖さんの頬が私の小さい指の幽かな力に、押されるまゝにソイと凹みました。私はアッと聲を立てました。その時私の目がほんとに覺めたのでした。けれども、糸織の丹前も、蠟燭の燈も、そして花瓶の下のお袖さんも、夢の中の氣色と少しも變らず私の眼に寫つたのでした。私にはどちらが夢か判斷する力がありませんでした。そして恐さに思はず、

「母アさん。」と怒鳴りました。

「何だねえとんきやうな聲を出してさ。」

と母は相變らず叱言を先に、それでも直ぐに私の側へ來てくれました。

「お袖さんをしまつて、お袖さんをしまつて——」

と私は云ひつゞけました。それから一週間ばかしと云ふもの、私は熱の爲めに苦しみました。けれどもかう〳〵とその時の事を云ふのは恐ろしいのでつい誰にもお袖さんの話をする氣になれませんでした。病氣が癒つてからも私は暫くの間、夜になると（寢るのは厭だ、夢を見るから厭だ）と云ひつゞけて人々を困らしたさうでした。それを少しも覺えてをりませんですが、お袖さんの頬の凹んだ時の恐さはいまだに思ひ出してさへ氣味が惡く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

どうしても夢では無かつたやうな心持がするのです。

節句もすんで雛壇が片付けられる時になると、お袖さんはまた私の室の簞笥の上へ載せられました。私は恐いから一處にしまつて貰ひたいとは思つたのですけれど、さう云へば譯を聞かれて、その譯を云へば必ず笑はれてしまふ事を知つて居た私には、どうしてもお袖さんを私の室から除つてしまつて貰ふことはむづかしい仕事でした。その癖、私はどこへ行つても、どんなに遲く歸つても一度お袖さんの顏を見なければ安心が出來ませんでした。私は夜きつと寢る前には燭臺をつけてはゝかりへ連れて行かれるついでにきつとお袖さんの顏を見にゆかなければ氣がすみませんでした。そうして母でも下女でも從いて來て貰つたものに高々と燈をかゝげて貰つてそしてよくしつかりとお袖さんの顏を見て――その頰の凹んで無いのを見――からでなくては決して眠る事はしませんでした。これには母も私の强情に負けて何とも云ひませんでした。强いて拒んだならば、また私が熱でも出しはしないかと云ふ懸念の爲めに弱くなつてゐたのではないかと後になつて私は思ひました。

思はず私はお袖さんの事ばかりを長くお話してしまひましたが、次郎さんに別れた後の私の唯一人の友達としては此お袖さんがあるばかりでした。私は學校から歸ると直ぐ此室に這入りました。そして夜食が濟むと又此室に這入りました。そして一言の斷りもなしに

次郎さんに捨てられてしまつた口惜しさと悲しさとさみしさとの思ひを籠めた私の眼をちつとお袖さんのその瓜ざね顔に投げかけるのでした。

「なぜこの頃はお前はちつとも運動に出ないのだい、毒ぢやないか。」

以前には私が學校をしまつて歸ると直ぐに次郎さんの家の方へ遊びに行く私をやかましく〳〵云つた母は、この頃になつて、打つて變つたやうに私を遊びに出さう出さうとつとめました。そして夜の御飯の折などに父が居ると、

「あなた歌子はこの頃どうかしてゐるのですよ、默つて室にばかり居るのです、ろくに私にも口を利かないのですよ――ほんとに厭な子だよ。」

など〻云ひました。父は例の通り無關心でたゞ母の言葉の毒々しいのを笑つて、

「内に居るも好いが身體を惡くしちや不可ん。」と云ふ位のものでした。

私の心はだん〳〵と沈んでゆきました。母を信ずる事が出來ずに淋しいと思つた私は、次郎さんに逢つてどんなに私の心が柔らいだかは知れなかつたのです。それがまた次郎さんのあまりにすげないやり方に逢つて、私の心はまたやう〳〵荒んでゆかうこしました。

その時私は計らず次郎さんの手紙を受けとりました、そして私は思ひがけぬ事を知りました。（未完）

薄すみいろ（三回）

奈々子

私の此日頃は、眠つてゐるのでなく目ざめてゐるのでもないような日が續いてゐるので、神經ばかり高じてゐました。間をへだてゝゐても、誰かしら語つてゐることが自分の身についてのことだと、すぐに心に響いて、すつかり聞逃すまいとするように聞きとりました。それでいつとなく私といふものは、此度嫁られる家から望まれたのは初てでないことも知りました。跡取り息子の方へと云つたときもあつたさうでしたが、それが纏らなかつたので、此度は次男にもらふのだといふのでした

それから次男の品行の惡いことも、わたしの兩親は知つてゐるといふこともお君ちやんが洩らしました。横濱の方の大店へあづけてあつたのが、松代から惡い遊びをおぼえて幾度父親から勘當されたか知れないのを、母親のとりなしで、堅氣から嫁をとつてそれを規模に別家させて貰ふのだといふことや、おしゆんちやんを貰へは堅くなると云つたからと、先方の親達が云つてゐたそうで、お父さんもお母さんも滿足してゐるといふことも聞かせてくれました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

家内のもの丶なかにも私に味方をしてくれるものもあれば、出入りの人のなかにも氣の毒がつてくれる者もありました。けれど其人達は表向きから、わたしの爲になるようなことは云つてゝれる資格がありはしません。わたしの枕許へきては小さな聲で、なぐさめるつもりで何やかと聞かせてくれたりしました。其人達の云ふのによると、わたしの兩親は婿の氣質なんぞはすこしも知らないで、すつかり先方の兩親にまるめられてしまつてゐるのだと云ひました。手のつけようのない懶惰者へは、賣人上りではいけない、すこしは押のきく實家をもつてゐて、順從な子をといふ注文に私が撰りだされたといふことや、親さへ承知すればすむからと井口が骨を折つて仲へはいり、話の進むようなうまい事ばかりお母さんの耳へ入れたり、面白い御酒の席へ度々お父さんをお招きしたりして、とう／＼結びつけてしまつたといふことを、大概見當のつくだけによせあつめて、話してくれました。

それに裏書きをするようなことを、時々お母さん自身からも洩しました、あの派手者の内儀はお前が死んだ末の娘と同い年なので、以前からほしがつてゐたのだとか、實の娘だと思つて、これからは二人連れで諸方へ出かけるといつたの、私のもつてゐるものはみんなやりますの、新調(こしらへ)るものはみんな態(わざ)と派手好みにしてあるのも其つもりだからのと、わたしがそれを悦ぶかとでも思つてでせう、

「好いぢやないかね、そんな姑が鉦太鼓で探したつてありやあしないよ。私もどうかさういふ氣になつて嫁が探したいよ、そうしたら、來たがるものは降るほどあるだらうね」

　子供だましといふばかりでもなく、信實さう思つてゐるらしい口振りなので、惡くとるのぢやない、お母さんは長い間二人のおばあさんを姑に持つて、いつまでも嫁あしらひにされて鬱屈してゐたので、姑の氣さくなのに何もかもあとのことは大目に見てしまうのだと好い意味に母の云ふことは解釋しても、わたしの耳にはちつとも心地よくも響かなければ、それで嫁く氣にもなれはしませんでした。

　お母さんはかうも云ひました。「あすこの家風はちつとも好いとは思つてゐやしませんよ。好んでやらうとは思はなかつたけれど、お前さんは別になるのだし、何もかも此方ではあすこの家の成立を知つてゐるから、乾度お前さんを大事にしてくれるに違ひないから、私のように姑で苦勞をさせまいと思つてですよ。」

　さうかと思ふと、跡取りの方のお嫁さんがそれ者あがりなので、假親をして花嫁らしく來はしたものゝ、あんまりばらがきで困ると云つてゐたが、私の娘とくらべて見てもらひたいといふようなこともほのめかしてゐました。私はお母さんの、そんなつまらない意地張り見たいな野心の爲にやられるのも、お母さんが姑が氣さくだからといふ、自分の滿足

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の足しにされるのも、みんなお母さんが今迄押つけられてゐた反動だと思ひました。さうして嫁られるわたしの、此思ひの反動はどうなるのだらうとも思ひました。

わたしにもしか戀人があつたら――。わたしはそんな大膽なことまで思ひついて見ました。

そのをりに、わたしに戀人があつたら、私の心はもすこし張がついたであらうと思ひました。わたしはこんな心を朽らせて病氣してゐることはない、わたしはいくら親不孝になつても好いから、乾度連退いてもらはうにとも思ひました。戀人でなくつても好い、わたしの心一つで思つてゐるだけの人でも好い、さういふ方さへあれば、わたしの心はどんなにか強いだらう。其方の方ばかりを一心に見詰めてゐて、わたしはどうしても嫌ですと死ぬような目に逢ふまでも、強情を張りとほさうに、わたしには一心に縋つてゐたいにもさう云つた縋りどころがありませんでした。わたしは自分の涙に體も心も朽させてしまうほど血の涙を絞つてゐても、どうしていやなのかといはれては、自分の心の厭つた、自分の魂の許さない男に、大事な操をよごされるのは、死ぬより嫌ですといふことが、どうしてもお母さんに分るように云ふことも出來ないし、自分自身にもどう解釋をつけてよいのかさへわからなかつたのでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私はつくづく、戀人がほしいと思ひました。かういふ果敢ない思ひを抱いて、自分と自分の成行きを憎み、生てゐたくもない體と心をもつてゆくものを、助けてくれるのは戀人ばかりだらうと思つてゐました。女の魂などといふものは自分のものぢやない、自分のものだと思つてゐても、ちつとも自分で大切にしてやることも、撫恤(いたは)つてやることも出來はしない。救つてやることも出來はしない。といつて親のものでもない、親は自分の所有品と同樣に、どうにでも扱かへると思つてゐるかも知れないが、さう手安く取りあつかへるものでもない、まして同胞の自由にもならない。預けておくのは信じきつた戀人の胸ばかりであらうに、わたしには確かりと預けておくところがない、縋つてゐたくても投げあたへられた綱がない。

わたしは自分の運命を、自分でつくることの出來ない意氣地のない女でした。さうしてあせりながら、富士の山の須走りといふところを辷りおちるやうに、ずるずるずると、引おろされてゆかなければなりませんでした。わたしは一日生てゐるのは、一日だけ自分の心の墮落だと知りながら、どうすることも出來ない、死ぬだけの決心もつきかねて、すこしでも生を樂しまうとする見えない慾のために苦しんでをりました。

わたしの戀は自分の心の領地に自由でした。わたしは異性の人に逢ふをりが多くなかつ

たので、わたしに戀の根を植ゑつける人には逢ひませんでした。わたしの戀の自由境には、わたしの空想につくりあげた人が時折往來するばかりでした。時代は、室町時代の武家のこどもあれば、鎌倉の殿原になつてゐるをりもありました。わたしも德川の末の屋敷娘になつてゐる氣の時もあれば、下髮の大時代の妾になつてゐるときもありました。それはほんの、解物をしてゐる、縫糸を如く間だけの短い戀もあれば、ふと庭の面などを見てゐて、涙ぐんできた眼に、五彩の虹がまぶしすぎるほどの強く燒きつくような幻影を眼瞼の裏に見ることもありました。櫻を生けて寐た春の夜の夢が、明けてもさめぬことがあつて、その夜降りだした春雨のように、二日も三日もつゞいて、たれこめて思ひこんでゐる時もありました。日が出るとゝもに心の帳の影から戀人は歸つてしまつて、さういふ時はわたしもはれ〳〵敷氣が輕くなるのでした。さうした私の思ひ人は、幽雅で、思ひやりの深い勇氣のある、一面に豪放な町奴式のところもあれば、大宮人のような雅やかな趣きもあり、義理がたい武士の血潮もふくんでをりました。

　その何もかもを持つた人でなければ、わたしは妻にならないといふのではありませんが、せめて斷片だけも持つ人と認めてから、取極めてもらひたかつたのでした。それはこんどの人もお腹の底の方には、すこしばかりさういふところはあるかも知れませんが、たつた一

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

度とはいへ、はじめて逢つたときが一番其人の心持ちがよく知れるものですのに、決して私にはあの人と融けあふような心地にはなれないと、どう考へて見直して思はれるのでした。それでもこれも我儘なのだからかも知れません。けれども、我儘なのならば、たとへどんな惡い噂を聞いてゐませうとも、自分であの人ならと思へば耳にもかけはしません。そして私といふものはちつとも斟酌なしに自分を押通して、兩親の心持ちなんぞを酌んで、病うような弱虫にはならなかつたらうと思ひます。お母さんは顫へてゐる私の魂の吐息を聞いて下さるには、あんまりありふれた推量のしようでありました。

「男撰みをするような、そんな浮氣な娘ぢやあない。」

　さういつた信念がお母さんの胸にはありました。固くさう信じてゐてくださるのは有難くつても、顏かたちが氣に入らなかつたばかりで、いつまでふてゝゐるのだらうと思ふただけでは、生の親でも子の惱みはしれないものなのかと、泣くより胸が痛みました。

　これまで縁談の申込みのあつたことも、耳にしたのはすくなくもありませんでしたが、さう何時も顏を赤らめてばかりはゐませんでした。さうして親を信じてゐる心安さは、どうせどれか一つに極るのであらう。其時は乾度改めてなんとかおつしやる。わたしは親も許し、自分の耳にもとまつて反感をもたないほどの人ならその時はいといへば、よいので

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さういふ人のあるまでは返事をしなければならない都度、微笑つて座を立つてしまうか首を振つて斷はつてしまへばよい、かりにも私を生んで下さつたお母さんが、私を育てながら氣質も知つてゐてくださるのに、私の嫌いなものぐらゐは知つてゐらしやるからと、平々凡々に淡い考へをもつてゐて、太平無事な日をおくつてをりました。それがどうでせう私は信じてゐたお母さんから、地獄の底へつきおとされるような氣がして、縋りつかうとするご惡鬼のような顏をして睨められるような悲しさを、現にも夢見るようになりました。

一度かういふことがありました。ある時ある男がたづねてきて歸つたあとで、お母さんがわたしにむかつて「あの人がお前がほしいのださうだよ」と云はれた時に、わたしは家中に疾風を起すほど駈出して藏の二階へとぢこもつてしまひました。お君ちやんが來ようがおつちやちやんが來ようが、二階へはあげさせませんでした。さうして御飯もたべずに泣いてゐたので、

「さつさと下りてこないか、お母さんの云つたことは極まつたことではない、戲謔なのだ。」

父親に下から怒鳴られてことがありました。私はそのとき一心になつて、四つ谷怪談のお岩樣みたいな方に願つたら、此縁談はやめになるだらうと思ひついて、簞笥へ顏をぴつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たり押つけたゝ、「どうか破談になりますように」と、膏汗が出るほど一心になつて祈つたときに氣のせいかぐらぐらと二階が動いたように思ひました。それゆゑ親が聲をかけてくれた時に、戯談だといつたのを疑いませんでした。お父さんが戯談にしてしまつてくれたのは、みんなお岩様のおかげだと信じてゐましたから。

そんな事もあつたので、なまじ私に知らせると、調ふものも破れると思つて親の慈悲で取極めてしまつたのかも知れません。專斷な、壓制な親だと怨むのは重々濟まないことでせう。けれど、けれど、けれど、子だとて別の魂をもつてゐます、私だとて親のお影で生て育つてゐる外に、わたし自身といふものも生てゐます。悲しいけれど、親不孝といはれても私自身も可愛さうだと思ひました。（未完）

たゞ一人

加藤みどり

弓子は不圖眼が醒めた。每晩消して寢る筈の電燈が其の夜は薄く淡く六疊の室内を照らして居た。雜誌を讀みながら眠つた事に漸く氣づいた。床に就いたのが十二時頃であつたのを思ふと既う夜は餘程更けて居るらしかつた、例も夜半に眼を醒ましても直ぐ安眠を續ける事が出來るが、其の夜に限つて何うしたのか頭腦が妙に引きつつたやうに惱み出して而して胸元が押しつけられるやうに苦しくなつた。さん／＼思ひ惱むだあとのやうに種々の苦痛が一杯小さい胸に押し込められてあるやうな重い息苦しさを感じた。

一體何うしたんだらう。胃の惡い故か知らんと自分でも考へて見た。矢鱈溜息が出る。胸に詰められた其の蟠を溜息をする度に吐き出されるやうな心持がする。後頭部の筋がピクピクする程痛む、その痛苦が押しつけて居る括枕に響いて、胸の高い動悸と一緒に何とも云へない不快の波を全身に傳へる。弓子はどうかすると斯麼夜のある事を思ひ浮べた。其のうちに五體の苦痛ばかりではなく云ひ知れぬ心の悲哀が夜の寂寞の裡に自分一人を襲つて來るやうな氣がして來た。斯う云ふ心持の押しよせて來た時は丁度黑汐が滿ちて來る

やうに弓子は自分で其の厭な氣分をどうする事も出來ないのをよく知つて居る。孤獨——何とも云へない寂しさが蟲もなかなくなつた秋の暮の寂しい夜の聲と交つて犇々と弓子の身體を取り卷いて來る。良人はと見ると後向になつて平和な眠をつゞけて居る。子供はと見るとこれも一日遊び疲れて長い靜かな呼吸を規則正しくくして眠つて居る。何か知らんすべての者から忘られ、捨てられ、かけ隔たれて、一人ぎり人生の荒寥たる砂漠の中に捨てられてあるやうな氣がする。弓子は折々冷かな人の　を白眼視して事につけ、物に觸れて自分の此の世に生れて來た運命を呪ふ事がある。親も兄弟も、果た良人も、我兒も、友人も皆自分一人を苦しめ虐む爲めに存在して居るやうにさへ極端にさう思はれる時もある。それは弓子を一層病的にさせる原因となつて來た。それと云ふのも弓子は姙娠中なので、さうしたヒステリカルになる時は良人の雄二郎は只啞然としてなす事も知らない程である。然し弓子が人一倍に人生を呪ひ人一倍に孤獨を感ずると云ふのは幼い頃からの境遇に依るので、全く弓子は眞に愛されて居ると云ふ自信を持つて居る一人をも世に持たないので、從つて弓子自身も誰一人眞に愛して居る者もないのである。十歳の時慈愛深い母に死に別れて以來、只一人の父親からも、又弟妹からも一種の變屈ものとして取り扱はれて來た。雄二郎と結婚して以來も其の頑なな心は充分に良人の愛情をうけ入れる事は出來ない程に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

拗ねてしまつて居た。其の寂しさは男の愛情の薄らぐと共に極端にまで烈しくなり身も世もあられぬ程に孤獨と悲哀に身を泣きくづす事があるやうになつた。病的なのだと自分でもさう思ひながら弓子はどうする事も出來なかつた。

弓子は又襲つて來た厭な氣分を凝乎として待ちうけねばならなかつた。過去も、現在も未來も只眞暗な運命に卷きこまれて行く。細かに自分と云ふ者も考へて見ると快樂もなければ、希望もない、それを自分で斷念める程に弓子の心は單純ではない、其れに對する反抗心と不平が世の中と周圍の者に對して火のやうに燃えて來る。それを爆發させたら大變な事になると知つて居るので弓子は凝乎と其の苦悶を自制して居た。

此の時突然ユサ〳〵と氣味の惡い程家が搖れて來た。漸々其の搖れが烈しくなつて來た、弓子は初めは自分の氣の故にして居たが直ぐ地震だと氣づいた。天災――、怖ろしいあの洪水のやうな大天災が起つて此の世の中をむちや〳〵にしてしまつたら何のやうに心持がいゝだらう。何のやうな學問も人力も及ばない天災が、即ち自然の力が蠢めいて居る此の世の穢い動物を一掃してくれたらあゝ何のやうに痛快であらう………其麽事を考へて居る間もなく地震は事なくて止むだ。

『大きな地震だつたね。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眠つて居ると思つた雄二郎は夢のやうに斯う云つた。子供は不意に半身を起した。

『地震だね、母ちやん。何故(なぜ)動くの。』

私の返事も待たずに子供は直ぐ又顏を臥せて眠つてしまつた。

再び沈默が續く。弓子も夜の沈默の中に引き入れられて行つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

まあ厭だ。先程の地震ですつかり家が壞れてしまつた。雨漏(あまも)りが古疊を一面に濡らして居る。見上げると天井はガランスで、土壁が何處も此處も皆崩れ落ちて居る。田舍の大きな弓子(じぶん)の實家のやうな氣もするし、又現在の住居のやうな氣もする、良人は其の壞れかかつた二十疊もあらうかと思はれる座敷の眞中で誰か明瞭と判らないけれど友人らしい人と語つて居る。まあ斯樣に崩れかかつた家に一寸の間だつて居られりやあしない、早く家を探して移らねば、雨がポタ〳〵頭の上から落ちて來る。何とかしなければ………何とかしなければ………さう弓子が焦れば焦る程雄二郎は悠々と友人と話して居る。女中のお梅はと見ると疊の上に雨が降り注ぐのも知らないやうに子供に繪を書いてやつて居る。焦れつたいと思ふけれど仕方がない。そのうちに雄二郎は子供と女中の傍へ來て同じやうに子供

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を相手に繪を書き初めた。弓子はむか〳〵する程腹が立つた。遂に自棄になつて、どうでもするがいゝ。呑氣つて程があると思つて弓子は外へ飛び出した。其の時は只良人も子供も女中も誰一人として自分の心持を察して呉れない、自分は只一人である、只一人で何處へでも行つて見やうと弓子は外へ逃げ出したのであつた。

外は夜であつた。星も見えない眞の闇である。何でも竹垣らしいものが家を取り圍むで居る。庭の方から狹い竹垣の外の道へ出た。何處にも家らしい影も見えない。庭の中からさし出した樹々の眞黑い枝葉と、小路を挾むだ何の樹か判らない小木が黑い垣をなして居る。其の間を弓子は歩いて行つた。すると十歩も行かないうちに眞白いものが目の前にぶら下つて居る。ハッと思ふとそれは女中の入れ忘れた乾し物らしかつたので、弓子はそれを取り入れねばならなかつた。道を遮つて渡してある棹に手をかけて何思はず空を見上げると同時に、月の光とも、日の光とも判らない光線はさつと地に流れた。同時に兩側の木立の葉影が道の上に落ちた。黃ろい弱々しい秋の日の光のやうでもある、空の暗いところから考へると不思議な月の光かとも思つた。其の時、垣の中の廣い〳〵庭に大勢の人が集つて居るのが目に止つた。其處には弓子の知つて居る人々の顏が集められた。勿論良人の雄二郎も居れば、女中のお梅も居る。親しい友人の誰彼(たれかれ)、それに田舍の父親も、弟も妹も居る。

『私は今何處かへ出て行くのだ。それだのに誰一人私を止めて呉れる者はない。』さう思ふと弓子は手に持つた白い布を抱いて聲をあげて泣かうとした。刹那、庭の入口のところに我子の影が見えた。さうだ。芳坊だけは母ちやんの味方だと弓子は急に泣き聲を止めて我子の方へ馳つて行つた。ほんの五六歩だと思つた間が隨分遠い。急に芳坊が大きな聲で泣き出した。

『母ちやんが、僕を殺すよ。母ちやんが……』と云つて庭の中の群集の方へ馳つて行く。

『……母ちやんが、何故、何故、芳坊を殺さう。』と口に出さうとしたが出せない。子供迄がと思ふと弓子は口惜しく胸が引き締つて來た。すると前後から良人の雄二郎と故鄕の父親とが刀を拔いて自分に向つて來る。

『大事の、大事の芳坊を殺す者は殺してやる……』其の聲が弓子の前後から押しよせて來る。弓子は子供の姿を見失ふまいと唯後を追つて行く。壞れかかつた大きな古家の石段の前に立ち並むだ弓子の友人達は手を叩いて笑つて居る。子供が逃げまどう聲と良人と父親の追つて來る聲とが弓子の頭を攪亂する。弓子は叫ばうとした。子供の名を呼ばうとした。何で芳坊を母ちやんが殺す事が出來やうお前までが母ちやんを捨てるのか……芳坊や、芳坊や……………力一杯に叫ばうとした時、………………あゝ其の時弓子は良人の大きな手で

揺り起されたのである。

「かあちやん……」

傍に眠つて居た子供は飛び起きて弓子に縋つて泣いた。弓子は良人の腕の上に夢の名殘の悲しみの涙をハラ〳〵と落して胸の動悸を兩手でおさへて居た。

女中も女中部屋から起き出て來た。

弓子は良人の手と、我子の肩を抱いて何時迄も〳〵泣いて居た。

左の人々の集りなる「ボクラ倶樂部」は今月「僕等はどうなるか」と云ふ月刊雜誌（一部三錢）を日月社から出すさうです。

一、編者より　同人
二、のたれ死まで　武林夢想庵
三、僕等の闘ひ　淺海孚一
四、そむける心　藤井黎白
五、無我苑解散後　安藤枯山
六、未定　江部鴨村
七、師友より　生田長江 外數名
八、雜話　同人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最初の家

五明倭文子

一

「みーさん、よく來たね、僕どんなに待つてゐたろう！」

淳は斯う云つて、美穗子のきやしやな身體を抱きよせた。美穗子は蒼白い顔を淳の胸にふかく埋めて、咽ぶように泣いた。黒いサラ〳〵とした髪の亂れが優しく男の手首にふれて、熱を持つた身體のかすかな顫えを感じると、淳はふかく心の奧にまで、そのいぢらしさが食ひ入るように覺えて、知らず〳〵強く抱きしめるのであつた。そしてわなゝく赤そうびの蕾のような唇に、自分の頰を近つけた時、廊下に人の來る足音がしたので、二人は靜かに身を離した。

足音は直ぐ隣りの部屋に這入つた。卵色に銀の青い陜地を左右に、幾つかの部屋が續いてゐるが、客は隣りの部屋と此處丈であるらしい、縁先の早や朝夕は涼し過ぎる簾戸を通して、中庭の高い常盤木の間から快い薄藍色の空が、靜かな夏の午後を偲ばせてゐる。

美穗子は強い抱擁の後の、上氣した頰に涙の痕の、泣き濡れた、はれぼつたい瞼を伏せ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て大儀そうに白い腕を飾臺の隅についた。一夜をまんじりともせず、トンネルの多い汽車に揺られて今朝早く東京へ着いた、まだそのまゝの黒つぽい御召の單衣に帯丈取つて、赤の多い伊達卷を、細い胴にきゆつとしめたのが下卑てゐずに、艶めかしくて可愛らしい姿である。

「とう〳〵來て了つた、とう〳〵家を出て了つた」

恁ふ云ふ悔ひと悲しみとが心の底の何處かに潜んでゐて、それが絶えず美穗子のあどけない表情を奪つて了ふように見えた。淳は美穗子がその悔ひを決して自分に見せまいと、つとめてゐるのがよく解つてゐた。それ丈に淳はまた一層に美穗子が可憐しくてたまらないのである。

男の烈しい情慾の衝動にかられて、抑えがたないその念を僅かに筆に綴つて、いとしい美穗子に送りやつたのであつたが、それが怜悧な美穗子の心を惑ふまで動かそうとは全く思はなかつたのである。

此度上京する前に、淳は美穗子の家のある町へ、人知れず立ち寄つて來たのだつた。松井と云ふ美穗子の從姉は淳には一番好意を持つてゐる女で、その時も、淳との關係が知れて父親が上京して俄かに美穗子を連れ歸つてからは、一人では外出も許されぬ程にきびし

い監督の中にある美穂子を二時間許り呼び出して、淳に逢はしてくれたりした。暑い盛りの八月の午後で、松井の離座敷に淳が一人で待つてゐると、美穂子は一人で這入つて來た、一月程見なかつた間に、美穂子はいたくやつれた姿になつてゐた。うすもの丶荒い縞の單衣が、その痩せた小さな身體を一層いたく〳〵しげに見せた。美穂子が自分に別れて、どのように淋しい悲しい朝夕を送つてゐるかを、よく察する事が出來た。美穂子もまたその再會の嬉しい涙の中に、可憐な胸の中をかくさず展いて見せた。その夕べ、別れのきわに淳は、いつそ二人は暫らく何處かへ逃れて了ふふではないか、と、云つた。併し美穂子は割合に落ち付いてゐた。愛する男と自分との他にまだ〳〵幾多の眼が輝いてゐることを彼女は忘れなかつた。

「貴方と私と二人限りの世の中なら……」

とは美穂子のいつも云ふ言葉であつた。美穂子には何故か親しみがたい、たゞ冷淡だとのみ思はれる父親と、母親の生前から父親とは關係があつたのだ、と云ふ繼母と、意地の惡い祖母と、その上に美穂子には許嫁の男があつた。その男を美穂子は最初から嫌つてゐた。

「私、あんな男は大嫌ひ、それは先方では私を可愛がつてはゐませうけれど、私はどうし

ても否ですの」

美穂子はいつも父親の壓制なやり方を、淳に訴えるように云つたりした。

其男は中學を卒つた時分から、美穂子の家で一切世話してやつたので、來年はもう大學の醫科を卒業するまでになつてゐた。淳は美穂子に接する度にその脊後には一つの、まだ見ぬながら黑い影法師が絕えずつき纏ふてゐる、不快さを自ら打ち消すことにつとめて來たのであつたが、其影の主は今、歸鄕して美穂子と一つ家に朝夕を共に送つてゐるのだ、と思ふ時、彼は云ひしれぬ或るさびしさと、さゝやかなる嫉妬とを感ぜずにはゐられなかつた。

「彼女に限つてそんなことはない、斷じてない」と、思ひながら尙彼は怪しい念に日夜なやまされた。

美穂子がその男に無理に手籠めにされたり、魔醉劑をかけられて死人のようにさせられたり、そのために美穂子が狂氣して入水しようとする、淡い幽靈のような姿を夢に見ることなどもあつた。淳はまるで捕はれたる人のような、たゞ快惱の中に幾日幾夜かを送つてゐた。勉強、努力、忍耐、之等のことは今自分に取つて最も大事な務めである、と思ふ思ひながら、淳はもう自分で自分をどうすることも出來ないような心の狀態になつた。そして美

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

穂子が思ひ切つて家を飛び出すと、云ふようなことは、とてもなし得ないであらうと諦めてゐたのであつた。

「美さんはこれからどうしやうと云ふつもりで、出て來たの？」

淳は何氣なく云つて、横になつてゐた細い身體を起した。

「どうするつて……それは貴方のお考へ次第ぢやありませんか」

美穂子は涙に濡れた黑い大きな眼を上げて、男の心をさぐりたい、とのようにその顔を見ながら云つた。

淳は莨卷の青く烟の中から、白いきれいな齒を見せて笑ひながら、

「そんなに直ぐおこらなくてもいゝじやないか、それは僕にだつて思慮はあるよ、まア安心して、もつと氣を落付けるがいゝね」

と、云つたが自分にも今どうしやうと云ふ纏つた考へは浮んでゐなかつた。

やゝ暫らく二人は沈默のまゝで互に何か打ち案じてゐるらしかつた。ゆふべおそく電報を受取つて、今朝早く兄の家を拔け出して來た淳は懷中にも、少しの貯へがなかつた。

「今頃兄は心配してゐるだらう」

淳は一人でそう思つて見た。此兄と云ふのも、美穂子と自分との關係は早くから氣付い

てゐて、そのためにいろ〳〵心配もかけた。つい此間もわざ〳〵遠方まで行つて、例の松井と云ふ美穂子の從姉にも逢つて、互にその親達を説いて見ようなど丶、相談をしてくれたりした。此兄の他にまだ多くの縁者が淳にはある。そしてそれ等の人達の眼がいつも注意ぶかく、自分に注がれてゐることは淳自身もよく知つてゐるのであるが、今恁ふして自分のために總べてを放擲つて了つた美穂子に對して、自分もまた何の他に觀るところもない、美穂子の望みとならば何事も敢えて辭すまいと考へたのである。

「ネ、美さん、恁ふして二人で逢つてゐる時はもう何にも考へないでおもしろく暮さうじやないか」

淳が優しく云ふと、美穂子も可愛らしい笑顔を見せて、二人は小窓の傍へ行つて長くなりながら、靜かな中に云ひしれぬ樂しいタイムを味ふてゐた。

長い夏の陽足も西に傾いて、やがて秋立つことを偲ばせる涼しい風が音もなく吹き入ると、淳の白い指から垂れた手紙の端が青い疊の上にサラ〳〵とうねつてゆく。彼は今、是迄に二三回逢つたことのある美穂子の繼母へ宛て丶手紙を書き送るのである。どう書いてやらうか、先方の感情をなるべく傷めないように、恁ふ思ひながら何度も書いては破き破

きした。

ゆふべ美穗子から電報が來たので、今朝早く停車場へ出て見ると美穗子は一人で上京した、兎にかく停車場附近の〇〇館に憩んで、よく話をきいて見れば美穗子は御兩親には無斷で家出して來た、そして私を一途に頼つてのことであると云ふ、それを聞いて私も一方ならず驚いたのであるが、併しもふ來て了つたのであるから、そこは何事も先づお含みの上で、お許しを願いたい、美穗子がこんな大膽なことをしたのも、その責めは全く私にあるのだから、幾重にもおわび申上げる。

兎にかくこんな風に書いて、自分から一度は通知もし、斷りもして置くがよい、と淳は考へたのであつた。此手紙が屆いたらきつと、繼母か誰か迎ひに來るだらう、でなくば父親自身來るかも知れない、それだと自分にも好都合である、徒に他人の噂などによつて自分を父親が誤解してゐるのは、ただに不快なばかりでなく、自分の將來にも損なことである、美穗子は父親が大變冷酷な人間のように云ふが、そこはまた親一人子一人の中だもの、心の中ではどんなにも案じてゐるのだらう、早く此の手紙も出して美穗子の無事なのを知らせて置かふ…………

淳は恁ふ思つて、封筒へ卷き納めた時、美穗子は湯上りの美しい姿になつてそこに這入

つて來た。

「家へ出して下さるお手紙?」

お白粉の匂ふ、かたばみを染め出したしやれた手拭ひを下げて、淳のいかつい肩の横から机の上をのぞき込んで美穗子は訊いた。

「うむ」と、淳は艶めかしい強い女の香に包まれて、ぼーつとしたように、その桃の花とも云ひたい、美穗子の顏に見入りながら、ソツト柔かい温かい手を握つて、

「もふ陽が暮れる、みーさんと二人で、幾日振りの夜だらう!」

二

榎町の床屋とパンやの間を左へ折れて、坂を登り切つた處は立派ではないが、それでも兩側揃つた邸町である。

淺井と、四角な門燈の出てゐる角から、青々とした要垣に添ふて七八間奥へ這入つてゆくと、そこに廣い空地があつて新らしい貸家が二軒並んでゐる。向つて左の見晴らしのよさそうなのが、淳と美穗子の隱れ家である。

家は芝居の道具のようなガタ普請で、それに疊數も僅かしかない狹い小さな家であるが、周圍の靜かさ、長閑かさ、隣の邸に萩や芙蓉の秋草が手入れせぬまゝに亂れ合ふてゐるな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ど、慿ふした若い二人には全く誂え向きの隱れ家である。大家は浅井と云ふ宮内省の官吏で、もう五十の坂を越えたらしい人の好さそうな主人と、痩せた色の黒い、見るからに神經の强そうな細君とが、代る〳〵來ては、親切にいろ〳〵敎えてくれたりした。

二人が此家に越して來たのは丁度廿日許り前である。それまで二人は〇〇館に泊つてゐたが、美穗子の家からは何の音信もなかつた。

「一體どう云ふ譯だろう！」

淳は自分の親の情深いに比較して見て、たゞ不思議にのみ思はれた。けれども美穗子はもう何もかもあきらめて居るらしかつた。

「いつまで慿ふしてゐても仕方がありませんから、貴方は兄さんのお家へおかへりなすつて勉强して下さいましね、私？私はまた杉本へでも暫らく置いて貰ひますから……いゝえ私、田舍の家へはどうしても歸りたくありません」

美穗子は自分のために、淳の大事な務めが一日〳〵と遲退してゆく事を何よりも氣にしてゐたのであつた。が、淳には却つてそれがおもしろくなかつた。

「みーさんはなぜそんなことを云ふの？慿ふして親の許しも得ず上京して來た者が………今更別々になつてゐる位なら初めから田舍に、おとなしく父さんの云ふことを守つてゐた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

方がましぢやないか、」

「……………ぢやどうすればいゝのでせう?」

「いつそ二人で一軒小さな家を借りたらどうだろうね、たゞ僕に今、金の持ち合せがないから、それが問題だ、併し此んな處に一日でも多くゐる程不經濟だからね」

全くそれはさし迫つての心配な事の一つであつた。美穂子が上京の際、否な思ひもして調えて來た尠なからぬ金は、二人の小遣ひに使ひはたしてはや若干も殘つてゐなかつた。此宿の拂ひ、それも二人の氣になつてゐた。美穂子は兎にかく心をきめて、母親が殘して逝つた衣類道具を金に替えてある、その三百餘圓の貯金を引き出したのであつた。

「みーさんの金を貰つては全くすまないけれど、今どうしても僕には都合がつかないから……」

「貴方はそんな事許り云つて……私のものは貴方のもので、貴方のものは亦私のものぢやありませんか、ぢや是で世帶を持ちませうね」

二人は恁んな言を云ひ合つて、遂に人知れず最初の家を持つたのである。

世帶と云つても、もとよりそれらしいものはなかつた。初秋の霧にかすんだ或る朝に、二人はたゞ一つのトランクを車に乘せて移つて來たのである。引越しと云ふに誰一人手傳

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひに來るでもなく、荷物とても全くない自分達に、人はどんな眼を持つて観察し、斷定するだろう、と、美穗子はたゞ果敢ないような、心細いような云ひしれぬ感に打たれたのであつた。併しその日は美穗子に取つて忘れがたないことのみであつた。兎にかく、直ぐにも要るべき釜や七輪、茶碗に箸、と云つたようなものは美穗子が近くの店へ行つて買ひ調えた。

瓦斯やが來たり、電燈やが見えたり、美穗子は一人いそがしい思ひをして、新らしい疊へ雑巾までをかけ、ほつと一息した時分、外はもふ眞暗に暮れて淋しい豆腐賣りのラッパの音が、彼方此方に響いてゐた。四疊半の椽の柱に身をよせて、美穗子は淳の歸りを待つてゐた。淳は午後から兄の家に出かけて自分の荷物を取り纏めたり、美穗子の親類に預けてある夜具ふとんなどを車夫に取りにやるべく出かけたのであつた。

何處からともなく魚の燒けるような強烈な油の匂ひがして、晝もまだな美穗子の食慾を俄かにそゝり出すようであつた。

「あゝ淳もさぞ疲れて歸ることであろう！何か食事の支度をしなければ……」と、思つたが、さて勝手にはまだ米も味噌も、食べるものとては何一つ調つては居ないのだ、ほんとうにまだ／＼足りないものだらけだ……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此時、暗にもそれと要垣の外に男のきゝ馴れた足音がして、淳は大きな包みを下げて歸つて來た。

「大變奇麗になつたね、よく働いてくれた……一人でさびしかつたつて！　その代りお土産があるよ」

淳は部屋の眞中に胡座をして、包みを解きにかゝつた。中からは茶器や菓子皿が順々に取り出された。

「是でも京燒の上等だよ。此方は備前燒、それから是は二人の湯呑、美ーさん、いくら位だか宛てゝごらん」

美穗子もニコ〳〵してそれ等を一つ一つ手に取つて眺め乍ら、

「まアいゝのね、貴方なか〳〵お上手ですわこれが貴方の、こちらが私のね？」

「あゝ、これを女夫湯呑と云ふんだね」

夕飯には淳の誂らへて來たうなぎ飯に、その新らしい女夫湯呑で熱い番茶の香を嗅いだ。

その翌朝はさびしい秋の雨がそぼ〳〵と降つてゐた。美穗子が床を離れて、先づ表の戶を啓けて、時計を見ると早や九時に間もない頃であつた。建付けの惡い椽の戶がいくら押しても引いても動かなかつた。其度に淺い庇に掩はれた、柿の枝から靑い葉を傳うて冷た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い雫がぽた／＼と美穂子の肩先や襟首に落ちた。柿の實は大きく鈴なりに、形もよくて美事に色づき初めてゐた。美穂子はこんな小さな家にも恁うして秋の木の實のこのましさを見ることが出來るのだと思つた。自分の、田舍の家では母親が死んでからいろ／＼な木の實の樹や、美しい花の樹が多く枯れてゆくことを、近所の人達は何か凶事の前兆のように云ひふらしたが、全く家でも此先どうするのだらうと、美穂子は考へた。

「ネ、お起きなさいな、家許りよ、まだ寢てゐるのは……」

何處が頭だか足だか分らない寢樣の、紫の更紗模樣の夜具の上から搖ぶつて見たが、淳は曉方になつてグッスリ寢込んでゐた。

晝食にはやう／＼米や、酒やと間に合つて淳が土釜の前にうづくまり乍ら、無器用な手つきをして葱を一本／＼丁寧に切れば、美穂子はフライパンで肉をてらすなど、二人はかたのように新世帶のまゝごとを初めたのである。

「甘（うま）い／＼、恁ふして美（みイ）さんの料理を食べてゐると、他處では全く食べる氣にならないね」

淳は恁う云つて、心から樂しそうによく食べたり笑つたりした。美穂子はそれを亦何よりのたのしみにて、毎日習つた料理を代る代るこしらへて見た。そうして、テンピだとか、洗米機だとか、割に高價な品までもいろ／＼と買ひ込んだ。晝間は恁うして他愛なく食べ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たり寢たりして送つた。夜には揃つて神樂坂や江戸川邊りへ散歩に出かけた。

救世軍の感謝祭に獻金を募る樂隊や、本屋のせり賣りや、活動寫眞、バーのかゞ〳〵しい光り、飴やの蓄音機など夜店はいつも賑はしかつた。殊に商家の子供達はワッショイの祭りさわぎが澄んで、池上のお會式に信徒の眞似をする群が幾つも〳〵、ドンドコ〳〵と、太鼓を叩き、燈籠を振り廻して此方、彼方にうねり歩いた。美穗子はそれを何よりもおもしろく感じた。二人は肩もすれ〳〵にして人眼にも羨ましそうに歩いてゐた。若い書生の群がわざと美穗子の身體を押しのけて通り過ぎたりする時、淳は馬鹿らしい程憤慨してそれを庇ふようにした。二十六七の艶やかな丸髷が素袷の黑繻子のゑりに、震ひつきたいような白いうなじを見せて、ごつてり粧つた半玉と連れ立ちながら、淳に會釋して、直ぐ後に續く美穗子を振り返り〳〵、して行くもあつた。美穗子は何とはなしに淡い嫉妬を覺えて、歸つてからもそれをとがめずには居られなかつた。

「貴方は、ほんとうに私に逢ふ前には何をして被入つたか分らないのね、あんな者にお馴染があるなんて……」

そんな時、淳はおもしろがつてわざと美穗子をすねさせるような言を云つた。そして互にものを取つて投げ合つたりした。けれどもしまいには、きつと淳から折れて僞りなき愛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の香ひを見せるのが常であつた。

朝々に秋の深さを偲はせる冷たい風が吹き增さつて、庭に下り立つ美穗子は白い素足を萩の下葉や、秋海棠の露にいとゞ濕らせた。

彼女は身體のために裸足のまゝで庭の掃除をするのであつた。柿の實は赤く熟して、葉は黃に凋んで、淨く掃かれた後からバサ〳〵と黑い土の上に落ち重なつた。柿好きな大家の細君は毎日それを取りに來て、中によさそうな實を二人の前に置き、落葉は廣い空地へ持ち出して風のない日にたくのであつた。其藤紫の煙の末が、灰色の定めなき雲の彼方に消えてゆくまで、二人は云ひ合せたように沈默の、淋しい面をして見送つてゐる事もあつた。

二人は只管、鄉里からのたよりを待つた。美穗子はやがて自分の讓り受くべき財産の一部を今貰つて、それによつて淳との生活の安定を得たいと、松井を賴んでそれを父親に訴えた、その返事を待つてゐるのである。淳は兄を通じて、これも自分の父親に美穗子との關係を打ち明け、一日も早く美穗子の實家へ交渉して貰ふべく、その父親の許しを待つてゐるのである。

恁うして若い二人はたゞ自分達の勝手氣まゝな望みを、譯なく達せられるものと思つて居るのであつた。(未完)

戀の誇り

原阿佐緒

白菊に姉の娘の病むときくかなしき心なげかけて居ぬ

忘られぬひとつのことにたへずわがいらだてることそあはれなりけり

文ひとつ書きて負債を果したるごとき安さに居る今日ぞよし

涙ぐむ日の照る畑をひそやかにわが白猫の行くを見つつも

くちづけをあたへむ來よとおほらかに吾めす人のある世ながらに

かちえたる戀の誇りも何ならぬ母とはなりてわが若さ逝く

あたたかさ肩に落ち來る小春日に物をぞ思ふ畑の細道

頬にふるる亂れし髮のそよぎにも愁そそらる秋風の中

いつまでかかなしき歌に倦まぬ身ぞとつぶやきはてず筆を投げ捨つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

病床相思吟の二

あな寂しわがわすれゐる誰よりか文も來よなど思ふわりなさ

うす寒き秋の光を感じつつ白きわが頬にあつる剃刀

山の霧草土堤に生ふ桃色のきのこに降るを見て過ぐる朝

秋風に身も魂も冴え冴えと醒めゆくここちあなや寂しや

一輪のしをれし花の誘ひける愁ひに君のまなざしも見ゆ

暗らきわが心に君が唇の灯のごと見ゆるわりなき日かな

捨てばちの心のまへに兒らの顔清げに笑めば涙おちぬる

きちがひの笑ひさびたる秋の日の光に心ふとおびえける

このいく日吾の心に笑みささず白らけてぞ居るはた泣きもえず

倦み勞れし身を起すべくいと強き刺戟のほしと思ふこのごろ

風のごと跡をのこさずわが無爲の日は逝くかなし若き日はゆく

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが心知らぬ顔にも見すごせる母恨めしとかこつ秋かな

病みあがり壁をそがひに夕されば白き槿の散るをいたみぬ

朝草を踏めば露散り素足(あし)の爪ひるがほいろに濡れて光れる

おしろいも手にとらぬこと二三月ありがひもなき山住ひかな

わが背子もけぢかくあらず見るものに山ばかり身の若さいとしも

捨てもえず保ちもあへぬものひとつわが持てる故かくもなやめる

金泥に描き出されし如くにもかの夕榮にたてる樫の木

馬の鼻撫でて語れる叔父とわが美くしと見る秋の夕月

水色の帳(とばり)に金の輪を繍ひしごとき月見る秋の夕に

ふるさとをのがるるすべを思ふより他なき日頃のわが身かなしも

豆太鼓ひとり振りつつ遊ぶ兒を見つめて思ふ遠きわが背子

文(ふみ)一つ得ればその日は足るといふはかなきままに秋も暮るるか

私の見た生活

三ケ島葭

——らいてう氏の所論をよみて——

紀念號に於て發表されたらいてう氏の「個人としての生活と性としての生活との間に於ける爭鬪」を私は大へん面白く拜見いたしました。そして今迄それほど深く考へてゐなかつたことをいろいろ考へることが出來ました。私は今、氏によつて自分の考が少しでも引き出されたことを感謝するとともに自分の思つたことを少し書いて見ようと思ひます。

昨年の春まで獨身でゐた私は當時どうしても自分で衣食して行かなければなりませんでしたから、自分としては極めて不適當な職業と知りながら小學校の敎師をしてをりました。その前、女中奉公をしてをつて新聞を見る暇も無かつた私は、その當時は敎授書を讀むのも生徒の氏名を記すのも自分の「孤獨な魂の要求」——即ち自分のための勉强の一部分としての——でしたから、はじめは敎師となつたことを自分の生活の向上だと思つて滿足することが出來ましたが、私の慾望が增加し、發展するに從つて、その生活は丁度、破らなければならない卵の殼のやうなものになると同時に、さうしてゐるうちに新らしく動き出した一方の生活、氏の言を借りて言へば「人間としての個人としての私の內部生活、私の孤

獨な魂の要求に基く仕事」即ち自分を敎養するための讀書と執筆との邪魔をする、たゞ食べるための生活になつてしまひました。尤もその時、私に、敎師としてどこまでも立ちうるところの自信があつたら、それを自分の全生活として繼續したにちがひなからうと思ひますが、さうで無かつた私は、明かに所謂二重生活をしたのであります。一つは自分の魂の要求のために、一つは自分の職務に對する責任のために。

併し、かうは言ひましたもの丶この二つの生活はかう單純に、「要求」だの「責任」だのといふ言葉で區別出來るものかどうかといふことを考へて見ますと、私が食べるためだからまことに仕方が無いと思つて、自分に不適當な敎師をしたのも、食べるといふことが自分の要求――それが間接か直接かは後で言ふことにして――である。

以上、やつぱり自分の要求でその職にたづさはつてゐたと言はぬわけにはいかないやうに思はれます。尤もそれはちよつと考へると極めて間接なものであつたやうに見えますけれども、已に食べるといふことが缺くべからざる要求であり、さうして、食べるためにはその職業が最も適したものである以上、さうして又、私が當時撰ばなければならなかつたし、又撰んだといふ意味で、それはまた正しく私の直接の要求であつたと言ふに何の差支へも無いやうな氣がします。即ち私としてはその仕事が唯一最勝の生活であつたに違ひな

いのです。けれどもその當時と雖も私にはなほそのほかの要求、具體的に言へばらいてう氏の所謂「魂の要求」もあつたのは事實です、そしてこれらの各々が各々の瞬間に於て私の生活の全部であつたと見なければなりません。事實に於て私の生活が、かういふ風であつたとすれば、私の前に卑めた食べるための職業も、また、私の直接の要求と言はなければならない。精神と肉體――それらを區別するのはあまりに卑屈な考であらう――とを具備してゐる人間にはその瞬間にはその何れも絶對の要求でなければならない。もし、さうで無いとしたら私たちは、眞面目な生活は出來ないわけである。だから自分たちが、一國なり一村なり一家なりに於て、その一人として生存してゐる以上、それらに對して、又、絶對の責任を持たなければ、人間としての價値は認められないわけである。それ故、自分に少しでも眞面目な人間としての素質があつたなら、自分の眞面目な要求に應じて與れたものに對しては、それが社會であつても、個人であつても、同じく絶對的の責任を感じるわけである。

かう思つて私は自分が二重生活をしてゐたやうに見えた時の心もちを思ひ合せて見ますと、自分が一時も早くなげうちたいと思つてゐた仕事に對してすら、自分が人としての自覺の前に、それに對して絶對の責任を感じないといふことは出來ないし、又それに對して

自分は否應なしに絶對の價値を奪はれてしまつたのであることに思ひあたります。けれどその責任が自分に充分果せるもので無いことは自分の本能的な全力を傾注しえないことによつて明らかであり、そしてその價値はその立場に於てのみ絶對といふまでのことでありますから、私としてまことに苦しい、いたましい、恥づかしいものであり、その苦しさ、いたましさ、恥づかしさは前からわかつてゐるのでありますからこれがもし一分間でも他の生活と並立することが出來るものであつたなら、幸福を求め、名譽を欲する私として、わざわざそんなつまらぬ生活を撰びはしなかつたらうと思ひます。けれどもそれは已に自分によつて現はれた唯一の實人生であると思つてをりましたから、その義務的な外部的な醜い生活――自分が無意識にさう思つて輕蔑してゐた――すら、それを自己の生活であると思ふと同時に、それが新たに來るべき自己の生活の內容であると思つてをりましたから愛人のため、愛兒のために、外面的に見れば分裂した生活、即ちエレンケイの所謂「美しき生活の二形式ファミリーライフとソールライフ」に於ては猶のこと數量的に之を見ればさういふ風に、自分が二つも三つもの生活をしなければならない、否、してゐると思ふ時も、實際に於ては、それが相互に爭闘してゐるといふ感じは致しませんでした。それ故か、私は氏のあの感想をはじめて拜見した時、自分が、氏の考へてをられることゝ同じやうな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ことを考へなければならない境遇、具體的に言へば、自分の勉強もしなければならず、子供の養育もしなければならない境遇にあるにもかゝはらず、生活の爭鬪といふ意味の言葉に接するたびに異樣な感じを與へられたのであります。

そこで私はまづあの命題に掲げられた「個人としての生活」と「性としての生活」といふ二つの言葉によつて表はされた、各のもの丶内容について考へさせられたことを申します。何故さういふことを考へさせられたかともう一度反問すれば、それは私が自分の實生活に對して前に述べたやうな考を持つてゐるからで、それが又、氏と違つた考であるからであります。こゝで端的に私の考を言へば、私たちの生活はそれが如何なる種類のものであつても、必然に、それが性としての生活でもあり同時に個人としての生活でもあります。それ故、前者が個人としての生活であり、後者が性としての生活であるといふことは、その眞の内容に於て同一のものを、形式的に、たゞ修辭の上で對立させたに過ぎないことになります。言葉を代へて言へば、性としての生活で無ければ、個人としての生活でも無いのですから、なほ分けて言へば、個人といふものと性といふものとを別々に考へることは出來ませんから、個人としての生活と言へばそれが同時に性としての生活であつて、單に個人としての生活だの、性としての生活だのいふものは、實際に於てありうべきものと考へ

られませんから、その間の爭鬪といふことも詩的な、情趣的な考としてよりほかには考へられないのでありまず、更に言へば生活はそれを内的に見れば常に一體でありますけれども、それはまた、時々刻々に交代變化して行くものでありますから、それに對して各異なつた立場から、各異なつた名稱を付することも出來ます。そこで氏の擧げられた「個人としての生活」と「性としての生活」とをもし、この意味に於ての二個の生活であると强ひて推斷すれば、その二つを並べ稱することが出來ます。けれどそれであつたら、もう少し具體的な命題を與へられなければならないと思ひました。そしてこの二個の立場と言へば、それは已に前にも述べた通り、空間的に並立するもので無く、時間的に交代連續するものであるから、その瞬間に於ては必ずその何れか一つの生活でなければならないから、そこに又爭鬪なるものはありえないことになる。それを爭鬪するものと考へるのは、或る瞬間の生活と、他の或る瞬間の生活とを、各固定的のものと見なして、その概念を無理に並立しうるものとして、それを無理に爭鬪させるので、爭鬪と考へる頭の中の事實は否定することは出來ませんけれども、この事實は、上述の理由から、實際に於てはありえないものであるから即ち、客觀的根據を持たない、單なる幻影に過ぎないものと認めねばならない。それを氏がかういふ風に考へられるのは、實人生の波動に飛び込まず、一歩退いて瞑想す

ることから來てゐるのではあるまいか？

私はこんなくどくどしいことを、氏のあの命題に對しての不審を晴らすために、思はずにはゐられないのでした。けれど氏のあの本文の中に書かれてあるところの具體的事實としての「個人としての生活」と「性としての生活」とは、私があの命題に對して抱いた不審を氷解させるものなのでしたから、以上は單なる私の考として書いたのに過ぎないのでありますけれども、私には氏があの中で述べられてゐるところの「種族に對して有つて生れた女性の使命と個人として又は社會の一員としての婦人の魂の生活や仕事や、職業などの間の矛盾」といふのや、氏があの中へ引かれたことによつて知つた、そして殆ど氏の思想の根底をなすと見られる、エレンケイの「ソールライフとフアミリーライフとの間に存するものだ」といふ闘爭といふのなどは、それほど重大な問題として考へられないばかりか、實際に於て、それらの矛盾爭闘といふことは考へることが出來ないのであります。それからその「色々な方面や部分をいかに撰擇し、いかに統一し調和し行くべきか」と考へる餘裕も無い、それだけいたましい生活――いたましいと言つて、それをどこまでも歎くのでは無い、いたましいものであると知つたことを尊く思はずに居られない――にあるのだと思ひます。何故といふに、私たちの己に打つ突かつてしまつた現實は、それが偶然であつて

も必然であつても、それはもう人生内具の不可抗力と見るよりほか仕方が無いのだと思ひますから。今まで一方の生活をしてゐたのが、俄かに、或は漸次に、二方の生活をしなければならないと氣が付く時は、その生活が已に事實として、二方面に擴がつてゐるのであるから、私は今更「私自身の生活の中に存する色々な方面」をいかに撰擇すべきかと考へるのはむだなことゝ思ふのです。二つになつたら二つを三つになつたら三つを交互に取らざるをえないばかりでなく、事實に於ては已に取りつゝあるのであるから、私たちは自分の實生活を一刻も早く自覺して、その各方面各部分について、努力しなければならないと思ひます。

しかし、氏は「人が持ちうる時間と精力には元來制限があります。そして人は同時に二つ若しくは二つ以上のことに自分の魂の總てを與へることは出來ません、餘程特異な人でない限りは。ですから或る一方の生活を深め且つ擴めやうとすれば、勢他方の生活に何等かの制限を加へなければならなくなるのは當然のことであります。またよりよく生きる上に必要なそして賢い方法ではないでせうか」と言はれました。けれどもまた、この時間と精力とに限りのあるといふことは、果して事實に合してゐることでありませうか？それは多くの人の生活を外部から見て、一方に無制限な時間と精力とを有するものを假定した時、

その一方即ち多くの場合を常識的に考へた一面觀ともいふべきもので、私たちがともすれば、理解といふ心理のものと誤解し曲解し易いことでありますが、更に深く考へて見るとこの說明は事實を具體的に說明したものとは言はれません。それは、もし、私たちの時間や精力に、本當に限があるとすれば、私たちの生活は或る一定の場所に於て固定し死滅して了はねばならぬことになりますが私たちの生活は決してそんな心細いものではないと思ひます。即ちこの時間といひ精力といひ、それはみな、外的には計量すべからざる私たちの生活の眞の內容を形成するものにほかならないのでありますから。

そこで、もう一度氏の言はれたことを具體的に推しはかつて見ますと、例へば今までは子供が無かつたから、十時間なら十時間といふものを全部自分の仕事に使ふことが出來たがこんど、子供が出來るとそれがために、五時間なり六時間なりを奪はれる。すると自分の仕事をする時間がそれだけ減らされることになる。兩方へ十時間づゝ與へたいのであるが、それは人として出來ないことであるから「何に價値をおき、何を撰擇し、何を抑へ、何に制限をおくか」といふ意味にとれるのです。そしてこのやうに、時間を外的に計量すれば、いかにもさういふやうに思はれますが、私たちの生活そのものが、外的には計量すべからざるものでありますからして、この常識的區分は全然無意味なものになるのではな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いでせうか。その自分の仕事又は子供のための仕事といふのが機械的なものであつたら、即ち眞の生活で無かつたら、一方の仕事が他の一方の仕事をすることによつて、それに費す時間々制限されると同時にその仕事も制限されると考へられますが、少くともそれが精神的の仕事であり、私たちの要求するほんたうの生活であるなら、それらは互に爭闘せず毀損せず制限せざるは勿論、むしろ相互に補充するものでなければならない、即ち一方の生活は他の一方の生活から新らしい意味を酌み來ることによつて擴大され深化されるものと思ひます。例へば私が今一つの婦人問題を考へてゐる時、どうしても戀人のことを思はなければならなくなつたとします。すればその時私の生活は己にその戀人を對立者としての生活で前の婦人問題を考へてゐた時の生活とは變つてしまつたものであることは言ふまでもありません。するとこの二つの生活、(或る瞬間と或る瞬間といふ意味の二つの生活です。そしてこの瞬間は外的に見ると長短のある瞬間です。)はその何れにも絶對値の存することを認められます。そして、前者を經、後者を過ぎることによつて、次の瞬間には更に、より意味深い生活に入ることが出來るのだと思ひます。現在の新らしい生活の經驗によつてえた新らしい力を持つて、言葉を代へて言へば、より優勝な位置に立つて、その婦人問題なり何なりを考へることが出來ます。即ち制限されるのではなくつて擴大されるのだと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

思ひます。さういふ場合に時間の制限といふことは果して考へられるでせうか。それはなるほど前者を固定的な有現的なものとして見れば、それはさうとも考へられますが、しかしそれはあるがまゝの實人生ではなくて、頭の上で想像した空影に過ぎないと思ひます。そればかりでなくこゝで私は時間といふものに對する今までの自分の考について疑を起さないわけにはいかなくなりました。

考へて見ますに、時間を十時間なら十時間二十時間なら二十時間と、初めから一定の長さあるものゝやうに考へるのは、どうも私たちの考へとして間違つてゐるやうな氣がします。よし、そんなことは考へられるとしてもそれはほんたうの時間では無いと思ひます。何故なら、私は、私たちの生活の內容となる時間のみを眞の時間だと思ひますから。そしてその生活なるものは常に一體であると思つてゐますから。そこでその生活の內容を形成するところの時間もそこに一つよりほか無いわけでありますから。

生活の內容となる時間といふのを、もう少し具體的に言へば、特定的の生の動向が特定的の境遇にあつて發展する唯一の經過なのであつて、それが眞の時間であると思ひますから、その他の時間は、概念としては考へられますけれども、それが果して私たちの豫想する特定的生活の內容となるかどうかといふことは、生活が刻々に變化するといふ理由から

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して豫想出來るものでは無いと思ひます。即ち私たちが漠然と考へてゐる時間が眞の時間となるかどうかといふことは、私たちの生活の本質から、分らないのだと思ひます。それ故私は一方の生活に何時間を與へ、一方の生活に何時間を割かうと考へ悶えるのは無意味なことだと思ひます。私は私の經驗上或る一日が或る一ヶ月よりも尊い時間であつたとゝもに或る一ヶ月がある一日よりも短く思はれたことを考へますと自分が今後に於てどれだけの時間を所有してゐるかといふことは、たとへ、自分の死ぬ時期がわかつてゐるとしても到底考へられないのであります。それだけ私は自分の生活に對してなみなみならぬ不安と、なみなみならぬ期待とを持つてをります。それで私は自分の生活に對する、より深い自覺によつてその生活にともなふ眞の力ある時間を感じたいと思ひます。

未成品一章

生田花世

○

或夜不圖眼の覺めた繁子は暗い天井を凝乎と眺めてゐる間に、奇怪な印象が泡の湧き起るやうにぶつぶつと意識の表を掠め、ものがなしい快感と、それに伴ふ恐怖とが胸と云はず手と云はず足と云はず、肺臟の柔かな膜の裏迄も蜘蛛のやうに匍ひ廻るやうな感觸を覺えて、我知らず身を顫はせた。

「私はまたどつかで彼の男に出逢ふのに違ない。私が逃げても匿れても、よしんば世界の隅まで走らうとも、あの物凄い顏は青白い微笑を湛へて追隨けて來るに違ない、あの怖い、あの幽靈のやうな、あのアラビアンナイトの中にせゝら笑つてゐる妖鬼のやうなあの男は、私を惱まして思ふが儘にしたあの男は一體何物であつたらう。あの妖鬼は私の身體に、宛も魚の口に釣針を懸けるやうに、烙印を捺していつた。假令私が何萬人の群集の中に居ようとも、それを彼の目が直ぐ分るやうに………………」

繁子は再び身を戰かして蒲團の襟に頬を埋めて嘆息を洩らした。

何だつてあんな奇怪しい出來事に逢着かつたのだらう。あの男は夕闇の底から宮守の様に黒い姿を現し、びろうどの様な蒼白い顏の、肉樂に荒んだ様な滑な顏の横から見える輪廓を、私の眼の前に思はず見惚れさせる程の距離に置いて靜かに「自分の方を見よ」と云はんばかりに歩いてゆくのだつた。唇は光澤よく濡れて光つてゐるやうに思はれ、眼は泥醉の前の瞑想に落ちてゆく快さにたへぬもの丶やうに半眼に開かれ、口より頤の筋肉は淫靡な廻舞に顫へてゐるやうに見えた。何か話しかける事があるのを唇で輕く抑へてゐるやうな表情をする爲に男は時々首を仰けたり、すつかり眼を閉ぢたりした。然し何も云はずに痛ましいびろうどのやうな青白い横顏を見せながら、「俺を見よ」と云つた風に歩いてゆくのだつた。その男の足のあげる靴の音はねばり強い密蜂のやうな囁に似通ひ、無雜作に歩いてゆく私の下駄の音を抱き締めるやうに、感じを縫ひ合し、心持を一つのものとするやうな好い調子に合奏せて來るのだつた。「俺の後から追隨いて來ずには居られまい」靴の音はさう呟く様に思はれた。その音は確かに快く、又確かに調子好く、追隨いて行くに從つて甘美くなつてゆくやうに思はれ、不知不識私は其の後に從つて歩いて行かずには居られなつたのである。

行手には黒い林が縱り上つたやうに見えて、灰白色の街道は吸はれる如くその黒い林の

中に消えてゐた。男は一株の柳の木の下まで來た時そつと横を向いた。再びそつと垂頭いて以前と同じやうに歩いたが、また暫くすると横を向いた。三度さうした時には愛を頬の筋肉によつて女にさとらせようと努めるらしく思はれた。私は一つの足數をも見落すまいと後から拾つて歩いて行かずには居られなかつた。そして男が振返る毎にくすぐられでもするやうな奇怪な戰慄と泥醉とに逢つた。

「何處まで？」

男は親しい低聲で聞くと共にその白い蛇の樣に思はれる手を私の肩に置いた。ぱつと温かさが常に涸渇いた肉體に傳はり、血液に交つて來た。私はどうする事も出來なかつたのである。

○

それは私が十二位の時だつたと思ふ。おしの叔母さんは私の母に絹糸を繭から取る座繰を敎へて貰ひに毎日來てゐた事があつた。おしの叔母さんは小柄の眼のくるくるした圓い顏をした利發な娘であつた。其頃繭を蒸す竈の火を焚くのは毎朝私の祖母の仕事であつた。私は隔日位に夕方になると風呂場で風呂の火を焚いた。その火が燃えてる間の惡戲に、果樹園の南境の土手の蜂の巣を、火を焚く竹片で突いては刺されたりした。大きな聲を上げ

て泣き出すと痛い所へ祖母は毒けしの膏藥をつけてくれるのが常であつた。

其頃私の家は養蠶で忙しかつた。村の人の出入も繁く日傭人は四五人もゐた。蠶糞の匂のする内庭で捨てられた屑蠶を拾ひ集めて菓子折に入れて方々に持ち廻つて桑をあてがつた事もある。暗く暮れてゆく夕方には私は弟と一緒に自分の家の棟數を數へたりした。母家、離家、西の倉、西の納屋、東の倉、東の納屋、前の養蠶室、馬屋、灰屋、番小屋等が廣い庭を圍んで並んでゐた。

それから半年とは經たぬ頃おしの叔母さんの婚禮の日があつた。其の日私は弟と一緒に母に連れられて叔母さんの家へ行つた。母は臺所で手傳をした。父は帳場で村の人と話をしてゐた。私は叔母さんの妹の龜さんと一緒に遊んでゐた。祖母さんが(おしのさんの母)二人のところにお膳を持つて來てくれた事を覺えてゐる。

おしの叔母さんが愈々家を出る少し前、午後二時頃であつたやうに思ふ、栗の實のまだ青い秋の初め方であつた。紫縮緬の裾模樣の振袖に白絹のやらうと云ふもの(角隱しの事)を掛け、繻珍の丸帶を胸高く結んだおしの叔母さんの姿はまるで人形芝居の初花姫の樣であつた。鼈甲のびらびらする簪の房が頰紅さした白い頰に觸れたり離れたりするのが格別美しかつた。盛裝したおしの叔母さまは母親に連れられてお宮とお寺とへ別れの參詣にゆく事となつた。私と龜さんとはいそ〳〵して追隨いて行つた。神社では廣い境内に赤い枯

松葉が一杯に落ち散つてゐた。鳥居の傍へ刈つた早稲を幹したほとりには十羽位の雀がばら〳〵と飛び降りて實を啄いてゐた。頭の上に見える何丈といふ松の高い枝には鳥が止つて鳴いてゐたし、宮の裏の谿谷の流れはさら〳〵と聞えた。おしの叔母さんは丁寧に頭を下げて拜んだ。

四人はそこを出てお寺の方へと歩いた。「嫁さん、嫁さん」から云つて傍の小山の松林の中で松葉を掻いてゐた子供等は叫んだ。子供心にもさう呼ばれるのが自分の名譽のやうに思はれて龜さんも私も嬉しがつた。

お寺の山門の前におげんの家があつた。家の前にはおげんの母が立つて見てゐた。おしの叔母さんと叔母さんを連れた祖母さんとは挨拶をした。丁寧に頭を下げたおしの叔母さんの紫の振袖が其時土の上に觸つた。私はつい後にゐてこれを見て思はずその振袖の袂を上げて持つてゐると、つとおしの叔母さんは眼を私の方につけて耐へ切れないやうな悲しげな叱嘖の表情をした。私も淋しい氣持が胸に込み上げたので、直ぐ手を離して了つた。それから追隨いて行かず、龜さんと二人でとぼ〳〵と引返しておげんの家の裏の谿谷に入つて、岩から岩を濡らして流れてゆく山清水を手に掬んで飲んだり、紅葉の枝を折つたり、山野菊をさがしたりして遊んだ。おしの叔母さんの眼は其後長い間忘れられず、何故あんなにして私を見たらうと思ひ惱む事が多かつた。

二つの心

岡田ゆき

A——ある紳商の妻
B——Aと同窓の女

A。ほんとうに、好く來て下すつてね。久しぶりでお話しが出來てうれしゆ御座んすわ。

B。え、何年か前の樣に、お互ひに話しませう。よくあの校庭を歩きながら、何にも世の中を知らない、お人形さんの心の樣な事を話し相つたものですね。

A。お人形さんの心とは、まあ面白いわ。然し眞實のお人形さんが幸福なのかも知れませんね。

B。世間見ずのお人形さんが幸福ですつてまあいやだわ。人間は世の中に出て來たからには、生き甲斐のある事をしなければ、生れた意義がないと思ひますわ。其の意味でお人形さんはつまりませんよ。私は自分がお人形さんの影から、日に、日に、脫しやうと、つとめてゐるのです。そして、少しづゝなりとも、眞實の人間になつて來る事を知つた時に、幸福を感じますの、ときに、此頃御良人樣は御變りないこと。

A。え、ありがたう。丈夫ですの。そして二三日前から商用で關西へ旅行して居ます。

B。さう、それぢや御寂しいわね。

A。え、ひとりで居ますとね、種々の事を

考へるのですよ。それに、今度關西へ行きましたのにも、新橋の馴染の女が一所なんださうですの。ですから私つまらないのですよ。

B。まあ、そんな事誰れが云ひましたの。貴女が御自分で御覧になつたの。

A。いえ、他から聞いたのよ。私口惜しくて仕様がないのです。

B。ホヽヽヽ。他から御聞きになつたのをさう直ぐに眞實になさる貴女の氣が知れないわ。自分がまのあたり見た事でなければ眞に信じる事は出來やしないわ。ね、さうでせう。貴女がそんなに御良人を恨んでゐらつしやる。しかも御良人は眞面目に商用で苦勞をなすつておいでだとしたら、ほんとうにすまない理ぢやありませんか。他人の言葉に迷はされないで、御自分を力になさいね。

A。さうおつしやればさうも思はれるのですけれど、私が來てから、もう一年の餘になりますが、始終それは面白くない事ばかりあるのよ。

B。貴女の御言葉に僞がなければ、貴女は眞の愛と結婚を握つてゐらつしやらないからですよ。御良人は貴女との間柄が純であれば、其の新橋とやらの女は云ふ迄もなく自分の妻以外の女に心をひかれる理はない筈ですからね。（微笑する。）

A。（感傷的に。）私は決して眞の結婚はして居ない。ねえ貴女二人の間には少しの愛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もないのに、他人の手によつて結びつけられたゞけなのですよ。只の一度も理解しあつた事もない二人の人間が、一處になつたつて、幸福にゆかれないのが當然ですね。

B。そんなに考へてゐらつしやりながら、どうして貴女はつまらない結婚をなすつたんでせう。

A。けれども、あの場合さうするより仕方がなかつたのですもの。

B。世の中には仕方がないと云ふ事はないと私は思ひますわ。貴女が其の時にもつと自己を尊重なすつたら。決してこんな結果にならなかつたのですよ。貴女は御自分の事を餘り他人本意に取扱つてゐらつしやるわ。殊に結婚などは他人本意のものぢやありませんよ。けれど、普通今日夫婦と云つてる者は大抵貴女と同じ道を歩いてゐるのですね。だから夫婦間のいざござが、ざらにあるのですよ。

A。けれども、私はもうこうなつてしまつたんですから、これから後どうすればよいか考へなければなりませんわ。

B。さうですね。貴女は御自分をもつと育てる様になさらねばならないわ。御良人に對するつまらない感情など放擲して御自分のために努力なさいよ。ね、そしたらきつと御良人との仲も、眞に理解なさる樣になるかも知れませんわ。

A。(ちつと考へて。)え、さうしませう。貴女に暫くでお目にかゝつてよい事をしましたわ。

B。此の次にお逢ひする時の貴女の御心の變化を期待してゐますよ。(四、六、二四。)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜詠草

ほぎ歌　　畔蒜こと子

おごそけきわがおほぎみのみのりの日いく千代かけてえやはわすれめ

にほはしくやほじほめぐるあきつしまねけふのみのりにいやかがやくも

しきしまのもろもろたみのよろこびのうたにはえあるけふのみのりよ

聖天子いまか踏みますたかみくらはたてもしらずかがやきわたる

ましらぎく吾もぬかがみにかざしてんわがおほぎみのみのりほめつつ

大君のみのり尊くあげたまふいまかなみだのおごそかに湧く

大君の千代をことほぎたぐふなきけふのみのりをひたあほぐかも

×

物河鈴子

恨みある男をゆるし春の夜の雨にまくらき道を横切る

素直にも物縫ひをれば春日ざしわかきわが背を撫づるなりけり

いと鈍きわが神經に彈力をあたふる如きドアの手ざわり

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

娘らしく我も甘えて見る日あり機嫌よき母と雛をかざりつ

春くれば空にも地にもあこがれのつきぬがためか涙多けれ

大うねり小うねりうねり荷橇ゆくそのもどかしさいかにすべきぞ

新聞の如く今朝わが君の戸の外に投げもおかまほしき此心かな

公園を一人あゆめば木蔭より出でくる風も君おもはする

桐の花遠くに匂ふゆふやみを別れてあるがことはりと泣く

ひた悲しわが枕べに電燈の灯が被ひよりこぼれゐる見ゆ

いささかの悶えも時に堪へがたく敷居に油ひくはわびしも

水捨つればころがり落つる夏の月濡れし砂の香ふと身に泌むも

熱ある日くるるに遲き白壁に額あてつつ君戀ふるかな

何となきよろこび一つもたらすと云ふがごとくに光る朝つゆ

嫁入り仕度に養蠶せむと思ひ立ち今宵ひそかに微笑みにけり

×

永井芳子

ひたもえし君がみ胸にわが身をば投げかけてこそ咽び泣きしか

まぼろしの消えゆく前に投げ出され今泣き沈む醜(しう)のむくろは

一人ゐのさびしさよはた嬉しさよ心の限り人をおもへる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

靜けさはまぼろしの國に遊ぶこと現し世もなしはた我もなし
天地はすみ渡れどもただ一つ曇りはてなきわが心はや

×　本山かじか

何事もしらざる君の靴の音と思ふにはやも頬のほてりくる
行く道の遠かたにして肉色の包みかかえし君のみゆるも
にくいろの本包もつ人みれば惱み狂ふとする心かな
いくちたび一人忍びて泣きにけむあまりに強き君のうらまし
きはまりて君こふる日は温表に青線高く標されにけり
一人ゐてしのびまつればいつしらず庭いちめんに蟲の囀けるも
わが君よ温度の表も五枚ほどここにかさなりなほひとりなり

×　濱小路浪子

あきらめて別れしことも迷ひなり懺悔をすればなほ迷ふべし
おもひわび力も失せて緣側に姪の玩具をもてあそぶなり
君かへしひとり果なくなげきゐぬほの暗き間の壁のかなしさ
ゆふまぐれ思ひみだれしその果に放ちやりたる人のかなしさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

えくぼ

畔蒜こと子

しろがねの月のおもてをかすめゆくあまつかりがねなくこゑさやに

しづやかに霧にぬれつつかりがねを恍とききいる秋くれつがた

みどり子の乳の匂ひに泌み泌みとひたりてあれば愁ひあかるし

ゑくぼある吾子のいとしやあやしつつかたみにかろくいだくなりけり

紅き灯をとらへんとしてみぢろぎす吾子すこやかに生ひたちて來ぬ

さかしげなぱつちりとした吾子（あこ）が眸（め）に聖（きよ）くさびしくそよぐ水仙

乳欲（ほ）しと眸（め）にいつぱいに涙ぐみ吾れをさがすかいとほしき子よ

千鶴（ちづ）子千鶴子とくとく汝れがすこやかに少女とならん日のおもはるれ

夕月の仄照る野風呂さらさらにあれわびしくもそよぐコスモス

ゆめのごとみどり子いだき恍りと我がたつ影のややややせてみゆ

ふくよかにげにやはらかに我が乳はや子の唇にあまく匂ふ夜

すこやかにはぐくみてまし我が千鶴（ちづ）子片言などをはやくききたや

何はなくさりとめしらぬよろこびをまつここちにて吾子をあやすも

おもはゆきここちに胸乳くつろがせ吾子が唇にぞそとふくませぬ

おくれ髪（げ）をかいあげつつも横抱きに吾子にふくますましろき乳房

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

燒あと

山の井みね子

はるばると越後の國に來りつつここにまつかな花を見てゐる

燒あとの寺の柱の横たふしそこにカンナがまつかに咲けり

見も知らぬ人のうしろにのび上りぐるりと見たり寺のやけあと

白木の端學生座りゐたりけりその瞳は何かかなしかりけり

走る人みなふりむけりここだくにカンナは咲けど燒炭の原

おちつかぬ旅の心もこの渚五智の濱べにたてらくよしも

網を引くと忙はしかる心にて裾かひたぐり吾も走り來つ

堂庭の百日紅のかへり咲き人めづらかに見てゐたるかも

鹿の子はパンをひきよせ旅人の吾が眼の前に食ひ終りたり

これかこの姿を見んとまそ鏡清き水邊に鹿の立てるも

ひねもすをのたりくねれる波の中はね上る魚がひそむものかも

鷄頭の重りたれし丹の莖のその下枝はもいよよ細りぬ

打たれし鷄頭はみな押しだまり風は吹けども動きもやらず

鷄頭の花のつづきにほのゆるるコスモスの花見てゐたるかな

てらてらと赤く光れるとうがらし傘さしながら今日も來て見る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月光　　望月れい

よもすがら心づかひしわが爲にねずの番する人はなきかな

いづかたにいねたまふ夜もかくばかりよくぬる人かあさましきまで

さだまれる戀はなかりき橋も水も白き月夜にたてるをとめに

戀と云ふ戀ならなくに下駄の緒の橋のたもとにきれてはかなし

わが大事もとをただせばその君のひとことよりぞはじまりにけり

この上はわれにかがやく健康をあたへたまへと云はまほしけれ

しかすがにわれをはぐくむ心根のうせざるものか筆を捨てざり

ひとすぢの筆のいのちもわが君のかたへにねむる日までつづかむ

鉢の花もすそにふれぬ霧白き月の露臺に君とのぼれば

足許の水の上にもくだけちる月の光よ見れどあかずも

月かげは君とねむれる石づかをおほふ大木の葉にもふるらむ

原稿募集

青鞜詠草及其他の原稿を募る、十日締切、但、編輯の都合により掲載の遲るゝことあり

本號に掲載すべかりしもの數編はすべて新年特別號に掲載すべし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

乙女椿零るゝ時

無門照子

鸚鵡(はあちやん)よ、
あの椿の樹を見ては、
その胸の赤いいろを丸い眼に見せる鸚鵡(はあちやん)よ
いつでも、あの樹の雀の群は
ひとりぼつちのお前の胸をそそる。

今日もまた
鮮かで新しい綠葉の
あの籠つた枝が柔かに搖れ、
名も懐しい乙女椿の花が
ぱらぱらと散つた……三つ、四つ、
……………………
二羽の雀の
奔放なその羽ばたきに――。

おお、その時、
お前は麻の實を啄みやめて、
古い言葉の血を吐く叫びで、
かなしさに堪へかねた聲で、
一聲、たつた一聲鳴いたぢやないか……。

ばあちやんよ、
お前もひとりぼつちですね。
……………………
わたしも、ひとりぼつちの私も、
乙女椿の散つた時、
ふと指先は震へ、
握りしめたペン軸を
急につめたく感じました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕陽

ふとしも見れば、
軒下のかげらふ、
あたり靜かに照りみてる斜陽、
……………………
圓かなる夢みごころに……
赤きばら音もなくこぼれゆく。

抑壓

のぼれ、のぼれ、
白金の月よ。
うら寒き冬の夜の
白金の月よ。
鬪けたるは、見入る間に
滿ち來るごとき……

叫ばまし、聲高く、
緣の歌を。
また、抑壓の呻吟を。
……………………
今し、うら若き女の摘み採れる
冬の野の道の芝くさは、
その胸にもの柔かう
うす青き愛(めぐ)し芽をもつ。

流れ

しづかなる流れの胸に、
起る輪波は眞白なり……
わがひややかなる淡蒼き唇には、
たださびしき旋律のみただよへる……
……………………
今しも、射し入る月にめざめつつ
わが心の流れの凄然として澄みゆくよ。

高須光治畫會主意書

自分の內心の要求に從つて生きて行くといふ事はこの世の中の要求の中最も尊い要求だと思ひます。けれども世の中に生きて行くのはかういふ要求のある人には苦しい事であると思ひます。今の世の中には餘裕がありません、貧者の多い飢える人の多い世の中であります。だから物質的な要求のみに從へない人はどうしても物質からはめぐまれる事を拒まれ勝ちです。尊む可き要求は出來るだけは生かしたいと思ひます。自然は何と命令するか知れません、しかし人間である私どもは、出來るだけは、さういふ要求をこの世に守りたいと思ひます、出來るだけは眞面目な尊む可き要求を持つ人に苦しい目を與へたくないと思ひます。これが私が高須君の畫會を皆樣に一應御すゝめする事の理由であります。

高須君の繪は未來の多いものだと思ひます。しかし、それは現在のものに或る肯定を與へても否定を與へる事にはなりません。今の高須君の繪は內心の要求から眞面目に描かれたものだと思ひます。高須君の繪は今年の春の巽畫會に二點出て居ました。銅賞を得られました。皆さんの中でそれを御覽になつた方は高須君の繪について皆さん自身の批判がある事と思ひます。兎に角私は一應皆さんに同君の畫會を御すゝめいたします。若し御入り下さる事が出來ましたら同君の爲に幸だと思ひます。（劉生）

規則

△會費は一ヶ月金五十錢とし一ヶ年間毎月事務所へ御出金下さい。

△御頒ちする作品は油繪六號カンバス（額緣なし）大のものとして風景或は背像、靜物等會員の任意でよろしいのです。

△會費拂込は毎月二十日迄とし、事務所より集金郵便を差しつかはします。都合で他の方法をとる事も會員の隨意とします。

△事務所は府下代々木中山谷一四六高須光治畫會事務所とします。

右發起人

木村莊八
高村光太郎
岸田劉生
北山清太郎

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

別れた友へ

山の井みね子

君江樣。ほんとに私は泣いてゐます。お別れと云ふものはこんなにつらいものでせうか。お立ちになるあなたは何もかも諦めてお出での御樣子でした。そう思ふて見るせいか猶いた〱しい思がこみ上げて來ました。今朝は旅出のごた〱に紛れていらつしやいましたわね。只頭許り下げていらつしやつたあなたを私ははがゆく思ふてゐましたわ。私の目は涙に曇つてゐましたけれども決してあなたを見失ひはしませんでした。もう馬車が一走りに霧の中にかくれて行くのを恨めしくぢつと見送つてゐましたあのお姿がぼうつと朝霧にかくされて行つた時私の目からは熱い涙がはら〱と流れました。見送りの方々に挨拶もろくに出來ない程とめどもなく涙が流れました。せめてあなたのおかあさんに丈けと思ふてふりむいた時又こみ上げて來る涙がたまつてはつきりしませんでした。ぐるりと後むきになつて涙を拭つてむきかへりました。「是非御飯を上つていらしつて下さい」とあなたのおかあさんがおつしやつてそこにゐられました、あなたのおかあさんもやつぱりとめどなく泣いていらつしやいました。私は何か申上げ樣として頭を上げるとあなたのおかあさんのお目からはら〱と涙がこぼれました。その時はほんとに苦しうございました。どなたにも挨拶もしないで北をむいたまま私は家へ急ぎました。一人になつても泣けて泣けてたまりませんでした。私の歸つたを妹は知つてゐてくれました。だまつて妹の先にたつて家に入つたまゝ私は自分の室へ入つて戸をたてこめてしまひました。自分の室に入つて始めて自分にかへりましたけれどもまだ〱泣きました。私は大事な〱友と別

れたのですもの。 私はだん〳〵おちついて來て寧さを覺えました。 その朝は大變に強い霜でしたものね。

どんなに遠くはなれたつて心と心とは決してはなれるものではありませんわね、 そう思ふと全く失はれた様に思へたかなしみはだん〳〵うすれて行きました。 それはどうせ一所に生涯をくらすことの出來ない私等であつて見れば別れると云ふことは當然のことですもの。 泣いて〳〵お別れしたことを靜かに思ふてゐます。 お別れってこんなにもつらいものでせうか。

せきたてられて御仕度をなさつて取り急いで馬車にお乘りになつたあなたを思ひ出しては見ます。 あなたはそは〳〵してゐられましたわね。 安曇野をはなれていらつしやる頃思ひ出しなされて別離のかなしさをはつきりとお思ひになつたでせう。 私は何故御一所に馬車で少しでもお送りしなかつたかと悔いてゐます。 あの時はそんなことをするのが人目に恥しいその様に思はれましたのですものゝほんとにはかないお別れでしたわね。 そう〳〵一言も云ひ得なかつたと思ふと それさへかなしいことの様にも思へます。 何も彼も云へない程私等は充實してゐましたのね。 何も云ひ得なかつたことがかへつて二人の別れをもつと深くもつと強く尊いものにして呉れたのかも知れません。 やす〳〵と云ひ得る程の心安さではなかつたのですものね。「御大事に」とも云はなかつたと思ふと遣せなくなります。 それでもお見送りのために第一着として私が參つたことが 私等のために尤もよろこばしいことであつた様に今も思はれます。 それで二人きり居る時間があつたのだと夫丈けでも私は自分の心を慰めてゐます。 あの時あなたのお目のふちが赤くはれてゐました。 髮をお結ひになる時障子のかげですゝり泣いてゐられるのがどんなにいた〳〵しく私の胸をさしたでせう。 その時私も泣きました。 二人はたんとお話ししたいことがあつたのですわね、 私はあなたの様に動亂してゐました。 髮結の紐がないとおつしやつた時もそれを見付ける術も知りませんでした。 帶上げとおつしやつた時も私は見付

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

け得ませんでした。帯締めとおつしやつてもさつき見た羽織の袖を二度もひき出して見た程とんまばかりしました。Ｓ先生もＫ先生もよく仕度をなほして下すつたのに私はぼかんとしてゐたのです。今更に恥しくてたまりません。何てとんまでしたらう。融通のきかないとんまと私はくすぐつたい様な思がします。

とう〱あなたは遠くへ行かれたのね、私は獨になつちまつたのよＫ先生はね「大事な友をなくして」と皮肉におつしやつたのよ。私は情なくなつてしまひましたわ。私はだまつてどきまぎしてゐました。「人が惡い」と思はれても仕方ない私はほんとにしやべることが出來なかつたんです。Ｋ先生の前では泣くまいとつとめたのによわくも私はこらへられなかつた。「かなしいことです」と云ひながらほろ〱としました。わらはれたかも知れない。

君江様、君江様、

あなたも獨ぼつちなのね。お互にこふして獨ぼつちなのね、こうしてゐてもやつぱりあなたのための幸福を祈る私だと思ふて下さいね。

あなたのお出かけの時にＫ先生はおつしやいましたの澄子さんは早く○學校へ入りたくつてあなたを世話したんだつて。いまはしい惡口を腹立たしく私はきゝすてましたの。人なんていゝ加減なことしか言はないものね。○町はあなたの後任のためにいざこざが持ち上るでせうよ。澄子さんはＫ先生の様な不正な人間には組しないのですからね。又暗闘がはげしく行はれるのだと思ふてゐます。そうして○町も改革されて行くでせう。私は澄子さんの來られるのをよろこびます。

御大切になさいましね、京は賑やかでせうよ。殊に今度は私の姉は「君江さんは幸福なんだ」と申しましたよ。一概に腹立たしく思ふたのは私の間違ひですわ。誰にも心持ちまで知る人でなければあなたが幸福に見えるのは當然ですもの。むしろあなたが可愛いさうだと考へてゐる私なんかゞとんまに見えますわね。只結婚のよろこび

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

や哀の服かさな外見上から評する人達が惜くも思はれます。どんなかなしみがその人の内部に存在するかを知らない人ほど残酷な評を下すものはありますまいれ。誰にもその人一ぱいの苦しみはあるものだとお考へなさいまし。そして自分をひきしめて自分の現在を進めて行つて下さい。後になげき後に嘆つ人はほめられませんわ。その人の不幸がその人の幸であるかも知れませんものれ。いくらでも潜ぎぬけて行つて下さい。御からだをいとほしんで下さい。さよなら。

光子

新年特別號豫告

新年號は特別號として豊富な内容にしたいと存じます。伊藤野枝さんも近々に御かへりになる筈です。

論文に　らいてう　山田わか　伊藤野枝

小説に　長谷川時雨　岡田八千代　生田花世　原阿佐緒　加藤みどり

飜譯に　山田わか　齋賀琴　伊藤野枝

詩歌に　與謝野晶子　三ヶ島葭　原阿佐緒

等の諸氏は乾度書いて下さるでせう。

なほ右の外にも　野上彌生子、岩野清子、小林哥津、荒木滋子、荒木郁子、山田邦子、伊藤あさ子、遠藤琴子、原田皐月、

等の諸氏も多分何か書いて下さる事と思ひます。

らいてう氏に

伊藤野枝

らいてうさま、

お體の工合はどんなですか、私は一週間目から産褥をはなれて居ります、この邊は御大典奉祝の「ドンタク」で大變です、東京もさぞ大變でせう。

漸く歸京が出來るやうになりました。けれども子供の事では隨分迷ひました。けれども結局矢張り同じ他手をかりるにしても自分の近くでないとどうしても安神が出來さうにもありませんので連れてかへることにしました。「里子にやるとにくむやうになるから、それではどちらの爲にもいけないから」と澤山の例をひいて誰も彼も不贊成をとなへますし、其人も此度は本當に父親らしい愛をもつて子供に對してゐて、矢張り不贊成なのです。私も隨分氣づよくなつて、たとへ三四ヶ月でも、留守中の停滯してゐる仕事を片づける間丈けでもおいて來やうと思つたのですけれども一日一日とだん／＼にさう云ふ決心もいろいろ考へて見ますと不安になつて來ますので捨てました。そして連れてかへることにしました。その代りになるべく時間をとられないやうにしつけやうと思つてゐます。幸ひに、今度の子はおどろくほど手がかゝりませんので、これならと云ふ氣もします。一日中下にれてゐますので、おむつの世話とお乳を與りさへすればそれでいゝのです。

今まであがきがとれないやうに苦しむでゐましたけれども全くあれは體のせいだつたと思ひます。長い間働けなかつた反動でこれからはどんなにでも働けるやうに體も氣持もかるくなりました。かへりましたら新年號の編輯に全力をつくさうと思つて居ります。長い間留守にした東京の珍らしいこともたのしみの一つです。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まだお讀も云つてゐませんが岩野さんの「愛の爭闘」が丁度私のお産した朝、四日につきました。皆がはら〳〵するのをその日から三日かゝつてよみました。そしていろ〳〵な事を考へさゝれました。全體としてはあの方の和らかな感情が可なりよくにじみ出てゐるのを一番うれしく感じました。始めから終りまでの苦悶に本當に涙を誘はれるやうな箇處がいくつもありました。他人の生活と云ふものは全く他からは幾分も本當には解らないものだとしみ〴〵思ひました。私はあゝした苦悶をつゞけながら六年間も一緒にゐらした清子樣の辛抱づよさをおどろかずにはゐられません。私は他の種類の苦悶なら自分の氣の持ち方一つではどんなにでも或程度までは堪え得ると信じてゐます。けれども夫婦の間の愛についての苦悶は一番たまらないと思ひます。私はあゝした一貫したあの方の苦しみがたゞそれより他の何でもないのにひどくおどろきました。さうしてお二人の辛抱づよいのに感心しました。私も可なり清子樣にはお近しく願つた方ですが、時たま何か不快なことがおありになる位は思つてゐましたけれどもさうした種類の苦しみがそんなにも永く續いてゐるとは思ひもよりませんでした。矢張り私たちが一寸した口のきゝやうや物のしかたでひよつと感情を害しあつて一日口をきかなかつたとか四五日氣持のわるい顔を合はせてゐるとか云ふのとおなじことなのだとばかり思つてゐましたが、あの日記で拜見しますと、清子樣の苦悶は本當に何時でも愛についてなのですもの、私はあれをよんでから六年も一緒にさうしてゐらしたことがむしろ不思議に思へる位です。清子樣にあの位の苦悶があれば同樣に泡鳴氏もどの位お苦しみになつたかしれないと云ふことは直に誰にでもお察しが出來ると思ひます。私はお二人がさうして長い間苦しみながらあの時まで離れずに生活していらしたのはお二人とも無意識のうちにあゝした機會を待つてゐらしたのだと思ひます。人間の執着つて本當に妙に強いものですものね、他人の家に同居してゐて多少不快な事があつたとして他へ移ら

うさ云ふやうな場合さへ妙な執着が出て何だか出るのがなしいやうな氣もしますし、その家の人に向つて何か尤らしい理屈をつけなくては、または機會が來なくては出るさ云ふことは云へないものですもの、それさ大したちがひはないさ思ひます。まして夫婦さしてたさへ一年でも半年でも一緒に生活すればどうしたつてさうお手輕に別れられる譯のものではありませんもの、まして岩野さんの場合にはお互ひに愛を持ちながら主さして、私は泡鳴氏さ淸子樣の肉體の不均衡が根になつてゐるさしか思へません、もしさうならばお二人さもおきのどくな譯ださおもひます。生田先生はあの序に「泡鳴氏の態度が非難に價することさの少いものさして見えて來るさ一緒に淸子さんの地位があまりお氣の毒なものさして見えないやうに――」さお書きになりましたが、私にはお二人さもお氣の毒に見えることにもなり、またお二人さもお氣の毒ではなくむしろあたりまへな成行になつて行つたのださも思へます。現に角あの日記では、お二人さも全く六年間を幸福におくらしになつたさは思へない氣がします。泡鳴氏がさうした生活に堪へないで新らしい生活を求めてあゝおなりになつたのなら淸子樣もつさ本當に御自分の爲めに幸福な道をおさがしになるさいゝのですれ、お二人が長い間苦しみながらさう〳〵本當にぴつたり抱き合はずにあんなことになつたのは最初の出かたが不自然だつたのださ私は思ひます。最初からたゞ友人關係さして丈けの條件で同居なすつたのならあの理由丈けで立派ですけれども、第二の條件を淸子樣はお斷はりになつても泡鳴氏はそれを決して撤回してはゐらつしやらないのを知りながら、同居なすつたのは、私には少し不思議に思はれます。無責任な想像かもしれませんが若し同居してゐらつしやらないで、あゝした要求を持ち出されなすつたのなら、あんなにまでお苦しみにならなくても濟んだでせうしあんな不幸なさ云つては失禮かもしれませんが結婚をなさらずさもすんだのではなかつかさ思はれます。けれどもこんな事はもう淸子樣自身でさうに御承

知の事なのを私がことさらしく云ふにもあたらない事でした。私は本當にあの日記を發表なすつた事をいゝ事をなすつたと思ひます。あれをよんだ人はきつといろいろな誤まつた猥雜な新聞の記事やなんかを信用したりしないで、本當にお二人の關係がどんなものであつたかと云ふことを知りそしてこんどの事が決して偶然なことでもなく不自然なことでもない正當の結果として解釋が出來るでせう、その意味で最もいゝ事だと思ひます。

何だか書きたい事が澤山あるやうな氣がしますが何れもくだらない事ばかりですからお目に懸つてからにします。もう直にかへれるのだと思ひますとうれしくて仕方がありません。四月ばかりの間ですがもう一年も東京からはなれてゐたやうな氣がします。かへりには彼處にもこゝにもよりませうなんて云つてゐましたけれども此の頃ではたゞ一心に東京にかへりつく事ばかり考へてゐましてもう特別急行で何處にもよらないつもりに二人ともなつてゐます。何しろ道中が長いのですからいやになります、下の關からは特別急行で廿六七時間でつくとしてもあそこまでにざつと六七時間かゝりますからどんなに急いでも卅時間以上かゝるのですものね、こんどかへりましたら本當に働きますわ、何時もいつも豫告ばかりでちつとも目ぼしい仕事が出來ないのがはづかしくて仕方がありません。せめて新年號は少しはいゝものにしたいと思つて居ります。お目にさへかゝればどんなにでもおしやべりは出來ますからこの位にしておきませう。

さう／＼あなたはお氣がつかなかつたかもしれませんが補助團の方で青鞜に短歌をよく出して下すつた名古屋の方で山田澄子つて方の名を覺えてゐらつしやいますかあの方が自殺なすつたさうですね、私は十一月號の女の世界で青柳氏のかゝれたものを何氣なくよんで本當にびつくりして仕舞ひました。お序でがあればよんで御覽なさいまし隨分お氣の毒な方のやうです。そんな方ならばもつとよくわかつてゐれば何とかしやうがありはしなかつたかとしきりに考へられます。それから水上粂と云ふ丸龜の方も矢張りお逝くなりなすつたやうです。少しでも交渉のあつた方が逝くなりなすつたなんて聞くと寂しい氣がするものですね。（大正四、一一、一七、）

雜誌規定

■毎月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓
■郵券代用は一錢五厘切手に限る（但し一割增のこと）。
■編輯事務、補助團會役拂込は青鞜社へ。
■廣告申込、交換廣告は日月社へ。
■購讀に關する一切の事務は日月社へ。
■原稿〆切期日は毎月十日限とす。當分の間、日月社內青鞜係宛のこと。

大正四年十一月卅日印刷納本
大正四年十二月一日發行

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
青鞜社內
編輯兼發行人　伊藤野枝

東京市京橋區弓町十三番地
印刷人　柴田杠一郎

東京市京橋區弓町十三番地
印刷所　千代田印刷株式會社

禁轉載

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町九十二　青鞜社　振替東京二一一六番

發賣元　本郷區元町二丁目四九　日月社　振替東京二八九一四番

大賣捌　東京堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■生田長江氏の新論文全集

最近の文藝及び思潮

四六版四百頁
布装美本箱入
金一圓税八錢

著者は權威ある文壇の高等批評家である。文壇の巨星森田草平、島崎藤村、夏目漱石、田山花袋、正宗白鳥の大物を俎に載せて手際よく庖丁目を入れて行く冴えは見上げたものである。著者の頭は鋭いがイラ／＼せず論理的であるがパッションを失はない。加ふるに其筆にデリケートなウイットを灑らしてゐる。尚「不正直なる沈默」以下十數篇は著者の自己及文壇に對する見識の正直且つ大膽なる告白で前の人物評論と合せて最近の文藝及思潮の精髓を窺ふに足る。（世界新聞）

■森田草平氏傑作煤煙續編

縮刷 自敍傳

菊判四百餘頁
布装美本箱入
九十錢税八錢

此作は云ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり、安倍能成、阿部次郎兩氏の評を附す。（萬朝）

粗き布のポットリとした装幀なり、同じ著者の「煤煙」と共に最も眞面目に一生懸命になつて書いた作で、世をして驚嘆せしめ作者の地位を固めたものである。今や「煤煙特製」と同形同體裁の縮刷となつて現はれた。更に愛讀者を増すことであらう。卷末に著者の友人の評が收めてある。（讀賣新聞）

■江部鴨村氏の新研究解説

タゴールの思想及宗教

四六版二百頁
美装優雅箱入
七十錢税八錢

タゴールの思想を消化し問題の要點を把握して自在に之を説明し去つてタゴールの內生命を紹介せんとしたる所は其の特色なり、タゴールを語るものゝ中大體を領せんとするものに手頃の書として推薦す。（朝日新聞）

印度の哲人タゴールの思想と宗教との大體を何人にも解るやうに極めて平易明快に説てやがて來朝の噂ある哲人を迎へんとする我讀書界に資し及我等が思想生活を豐富ならしむる一冊たらしめた良書である。（國民新聞）

■高濱虛子氏作長編 附錄子規書翰

子規居士と余

四六版三百頁
クロース美本
九十錢税八錢

子規と著者は同じく伊豫の土に生れ同じく俳名を一世に擧げ其交情師弟の如く兄弟の如く親友の如きものあり、著者故人を懐ふ事深く玆に此書あり更に故人の寄せたる書翰百數十通を添へて之に江湖に示せり。（時事）

或時代の生める特異の文學者之を圍繞せる一團の青年ゐと其淸き文藝憧憬の念、是等が率直に叙述されてゐる一篇の作品と見るべく子規氏の傳記とも云ふべく而して又一面明治文學史の一部とも稱し得べし。（報知新聞）

發行所　東京本郷元町二丁目　振替東京二八一九一四　日月社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一編に付十錢稅二錢

現代百科文庫

五部以上は郵稅不要

新宗教の暗示
宗教叢書

宗教の新意義（三編分）谷本博士
神社崇敬と宗教（五編分）廣池博士
宗教入門 江部鴨村
神道綱要 西川光次郎
救世軍 同
カラマゾフ兄弟（六編含有）森田草平
シヤクンタラ姬 同
大聖釋尊 江部鴨村
高僧と母 同
續高僧と母 同
俳聖芭蕉 岡本默骨
道元と親鸞（四編分）村上博士
天理教祖觀（五篇分）奥谷文智
金光教觀 和泉乙三
親鸞と法然 村上專精
立正安國論評解 柴田一能
教祖として見たる天理教 廣池千九郎
耶蘇基督 前島潔
カーライルの宗教 淺海寥一
近代思想と宗教 柏原祐義
十六羅漢 山邊習學
オーガステイン論 小宮豐隆

文藝思潮叢書
名流論作

▼父と母と娘（小說）森田草平
▼無用語（評論）安倍能成
▼銀座の夜（小說）小宮豐隆
▼藝術家と藝人（評論）生田長江
▼三十三の死（小說）素木しづ
▼杏の落ちる音（小說）高濱虛子
▼一から四まで（小說）河東碧梧桐
▼文藝評論（評論）小宮豐隆

古今名著眞髓
梗概叢書

神曲 ダンテ 森田草平
ベル・アミー（發賣示）モウパツサン 德田秋聲
懺悔錄 ルーソー 生田長江
マダム・ボヴワリー フローベール 相馬御風
死の勝利 ダヌンツイヨ 水上齊
英雄崇拜論 カーライル 中村古峽
ドリアングレー ワイルド 相馬泰三
女の一生 モウパツサン 廣津和郎
春の眼ざめ ウエデキント 生田長江
武器と人 シヨウ 福永挽歌
ボオラ（外一編）ピネロ 加藤朝鳥
ファウスト（三編分）ゲーテ 森田草平
オルレアンの少女 シルレル 水上齊
アルネ ビヨルンソン 相馬泰三
決鬪 クープリン 楢田東聲
ベルグリンの哲學 牛田貞平

發行所 東京本郷元町二丁目 振替東京二八一九四 日月社

曹洞大學教授　忽滑谷快天先生評釋

和漢名士參禪集

和漢の聖帝賢臣名僧碩學が參禪の佳話悟徹の美談を蒐めて一々これに辛辣の批評を加へ以て學道の正路を示し在家參禪の資糧に供す讀者これに依つて先德の鉗槌に接し古聖と禪を商量することを得む

四六判假名附　定價壹圓　郵稅八錢

笛岡清泉先生著

美人禪

加藤咄堂先生
高島米峰先生　推讚

加藤咄堂先生曰はく「戀に泣く美人が嬌態を寫して佛々祖々の玄機を語る文に艶冶の趣ありて想に超脫の旨を存す孰れか禪孰れか戀「美人禪」の一書讀み了りて轉た恍惚たり」と

四六判假名附　定價壹圓　郵稅八錢

東京小石川區原町　貯東京一五六八六　丙午出版社

東京小石川原町　貯東京一三五三　鷄聲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十二月號

科學と文藝

價廿五錢

■ミュンヘンに於けるイプセン……榎本安三郎

□金彌のために……岡田八千代

□赤い鍵（戯曲）……高倉輝

□海への騎手（シング戯曲）……陶山夢

□感想……淸浦明人

□人生と淋菌……羽太鋭治

□英詩……岡田哲藏

□宇宙の構造（附錄）……兒玉昌

□ゲエテと植物學……小川博士

■純粹藝術に於ける形象の意義……小笠原秀實

發行所 東京牛込矢來町三 交響社

■本然生活

再版發賣 定價壹圓

加[illegible]著

これ新人の宗教である。これ彼が信仰の破壊と懐疑の暗黒との中より堀り出したる眞理の黒光である。血と涙とを以て創り出したる新信仰新生活新宗教の第一聲である。眞の光と眞の力と眞の生命は玆に輝き且つ湧いて居る。今や著者は新しい生活の第二の階級に入らんとして居る、そして第三の生活を想望してそゞろに胸の血の湧くを覺えて居る。この書はその爲めの第一階級である。現代の苦悶に悩める者、新しき世界と光と力とを渴望する者は著者と共にこの第一階段を蹈まねばならぬ。

洛陽堂

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本号の作製にあたり内容の

森田草平作（好評再版）

縮刷 自叙傳

入箱菊半截四百頁
布装幀木版七度刷
金九十錢郵税八錢

本書に對する著者の親友諸氏の合評
安倍能成氏
[illegible]次郎氏

[illegible]出世作たる煤煙の姉妹編!!

自序より……今「自叙傳」を再び世に送るに就て僅に自ら慰むることが一つある。それは兎に角「煤煙」と共に當時に在ては一生懸命にかいたものだと云ふことである。一生懸命になる、それは今の自分にとつては容易に成れないことである。

▲彼の名作「煤煙」に續くべきものとして著者の畢生の力を籠めし當時の内生命の赧白の表現なること今更言ふまでもなし「兎に角煤煙と共に當時にあつては一生懸命に書いたものだ」と著者の言ふ所は僞りなき告白（朝日新聞）

▲世をして驚嘆せしめ、作者の地位を固めたものである。今や「煤煙」と同形の縮刷となつて現れた、更に愛讀者を增すことであらう（讀賣新聞）

▲粗き布のポツトりとした裝幀なり、此作は言ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり（萬朝報）

▲「煤煙」と相並んで文壇を騷がしたる作者得意の作である主人公要吉が山から歸つて女と別れて仕舞つた遣瀨なさに段々と自墮落な生活に沈んで行く徑路が、讀者を壓し付けるやうな、生一本の力で鮮かに書かれてゐる、「煤煙」に見えてゐる主人公の芝居がかつた遊戲的の氣分が（主人公自分に取ては勿論眞劍なことであつたらうが）大分に無くなつて、いぢらしいほど人間の弱さ果敢なさが現はれてゐる、其れだけ讀者の共鳴をそゝる力が强くなつてゐる、素裸になつた人間の眞實性がしみ〴〵と味はれる、此の意味に於て吾々は「煤煙」よりも「自叙傳」の力が藝術品としても、ヒユーマンドキユーメントとしても、より内容がありより親味があるやうに思はれる（世界新聞）

東京市本郷區元町日月社・振替東京二八九一四番

本号の作製にあたり内容の
一部について天理図書館の
御厚意により同館所蔵の
原本を使用いたしました

青鞜

昭和45年6月15日発行　【第10回配本】

青鞜第5巻 12月号

編著者	平塚らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	江明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
AL
1756
S45
V.5
no. 11

53 126CO 406
XL
04/09 30016-162 UA
HFGroup

University of Colorado at Boulder
U18304 6746589

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PL
756
W6
S45
v.5
no. 7-11
1915

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER